TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No.23
December
2010

総会・講演会

CONTENTS

		ページ
表紙　根岸英一氏（2010年度ノーベル化学賞受賞者）		photo: Kyodo Photo Center
前グラビア　総会・講演会		photo: Hirokazu Takayama
同窓会メンバーから	小中陽太郎　吉田　哲　竹内　葵　石渡裕政	2
第2回三上フォーラム報告		5
2010年度総会報告	①講演会　江端貴子	6
	②総会報告	10
	③決算・会務報告ほか	11
アンケート特集　フルブライト同窓会各地区の現状と活性化の方策を探る		12
ガリオア・フルブライト同窓会の活動	中部同窓会	16
2010年度財団奨学生冠名リスト／日米教育交流振興財団の状況		17
第35回日米交流チャリティー・ゴルフ大会	田中榮治	18
最高裁・国会見学ツアー	ジュリア・ジョーンズ	19
日光・宇都宮ツアー	山田真之	20
鎌倉歴史散策ツアー	外池滋生	21
セミナー報告	藤原和博氏　我謝京子　梯久美子氏	22
同窓生の掲示板＆短信特集		26
世界フルブライト・アソシエーション第33回年次総会（ブエノスアイレス）		35
事務局から　佐藤ギン子会長退任　60周年記念行事に向けて		36
後グラビア　ゴルフ大会　日本人フルブライター歓送会		

表紙＝根岸 英一 氏

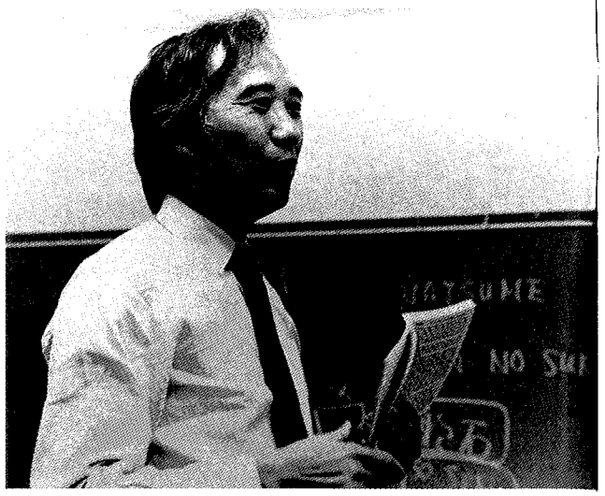
75歳。米パデュー大特別教授。満州から神奈川県大和市に育ち、東京大、帝人、そして1960年、フルブライト奨学生としてペンシルベニア大へ。Ph.D取得。有機合成化学クロスカップリング分野で、有機金属化合物、亜鉛を使用し、安定性、効率性を向上させて、C-C結合生成物を得る「根岸カップリング」を発見。今回の受賞につながった。米インディアナ州在住。

同窓会メンバーから

キング牧師とハロウィーン

小中 陽太郎
1983 West Virginia U.

作家・日本ペンクラブ理事・星槎大学教授



1983年8月、Asian scholar in residenceという前年から始まった制度で、ウエスト・バージニアのモーガンタウンに着いてすぐ、ワシントンDCで、公民権運動の集会がひらかれる、と耳にした。大学から、夜行の貸し切りバスが出る、という。どういう集会かもわからぬまま、妻と二人の娘と乗り込んだ。バスは夜中にアパラチア山脈を越えて、ゲティスバーグ、ポトマックをすぎ、早朝国防省広場に到着した。

モールにいくと、スピーカーから力強い声がひびいた。それでやっとわかった。キング牧師らによる公民権運動のピーク、ワシントン大行進から20周年の記念日だった。

1963年は、リンカーンの奴隷解放宣言から100年、キング牧師は、100年たってどこに自由があるか、と訴えたのだ。

81年、ビザの長い拒否の後、ニューヨークの反核デモに参加、リバーサイドパークで、「正義を洪水のように」という反戦牧師コフィン師の説教を聞き、キリスト教に接したぼくは、そのアモス書の聖句がキング牧師から来た事さえ知らなかった。

それから20年、「公民権法案はできたが、どこに自由があるか」とアフリカ系アメリカ人たちがふたたび立ち上がった。

私は雑踏の中で二人の娘の手を引いていた。

そして15年前にメンフィスで暗殺されたキング牧師の声が朗々と轟いた。

"I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character"

そのときである。文学に携わっていたくせに、「言葉が力となる。はじめに言葉があった」ということを実感したのは。

幼い二人の娘が、これから人種のるつぼといわれるアメリカで学ぶとき、いじめられないか、仲間外れにされまいか、と父のほうが心配しているときに、この言葉は決定的な励ましとなって耳朶をうった。

「そうだ、大丈夫だよ」、と父はむすめたちにいった。

その夜、モールの木の間隠れに、ちいさなランタンが瞬くのが見えた。行ってみると、できたばかりの5万1千のベトナム戦死米兵の名前を刻んだ黒い長い記念碑で、迷彩服の兵士がテントで不寝番をしていた。アメリカの悲劇を2度も見る気がした。

それからわずか2カ月後、ハロウィーンにまたワシントンにでかけたとき、宵闇迫るリンカーン記念堂で、父親が、突如かわいい子どもから "trick or treat ?" と手を出され、すわ追剥か、"Pardon ?" と真顔でききかえす父親に、娘たちは、あきれ顔でくすくす笑い「飴、飴」と手を引いた。こどもたちの人種のるつぼに溶け込むことのなんと早きことか。

母 校

吉田 哲
1977 Harvard U.

元・共同通信社記者

「これから教室で話すエネルギーの問題は、わずか1%の話だ。残る99%のエネルギーは、日々地球上から無駄に消えている」—2度にわたる石油危機の後遺症が世界全体に漂う1977年秋、ハーバード大学のダニエル・ヤーギン教授の「エネルギー講座」は活気に満ちていた。最近、NHK教育テレビのマイケル・サンデル教授の「白熱教室」が話題を呼んでいるが、それと同じような熱気があった。

セミナーのジョン・オデール教授の「国際経済学」は20人程度の少数で、とにかく議論は延々と続いた。論文は東南アジア諸国連合（ASEAN）のアジア地域共同体の話を書いたが、雪の積もった日に教授室に呼ばれ、半日みっちりと論文について質問され、議論した。結果は「Aマイナス」。ゼミで発言がもっと欲しかったのがマイナスの理由だが、「情報を最も良く理解している」と評価された。

ハーバードではジャーナリストのプログラム「ニーマンフェロー Nieman Fellow」として1年間過ごした。米国のフェローは12人、外国からはポーランド、南アフリカ共和国、インド、そして日本の4人。ニーマンでは、ハーバードの教授たちや研究者は無論、キッシンジャー前国務長官や故エドワード・ケネディ上院議員から作家のジョン・アップダイク氏など多彩な人を招いて昼食会やセミナーを開いた。

以来30年余り、ハーバード大学からは手紙やメールなどが自宅や会社に来る。ご承知の卒業生も多かろうが、Harvard MonthlyやHarvard Travelは大学のニュース、人事、旅行案内で中身が充実している。学長の話から教授や助教授の募集。ホームページに飛ぶと、学術業績を事細かく紹介したり、就職情報では学生寮の料理人の募集まである。

Harvard Travelではシルクロードの旅、アマゾン紀行、ヒマラヤ登山など世界の秘境にそれぞれハーバードの専門教授や講師が随行して説明を受けながら旅する企画だ。

ひるがえって日本の大学はどうだろう。他の大学は分からないが、わが母校慶応義塾大学について言えば、卒業以来、大学のニュースや教授陣の動きなどの便りはまったくない。大学の名誉のために書き加えるが、私は卒業後転勤が多く、住所も転々としたから把握できないのかもしれない。あるいはホームページを開いて登録すればいいのかもしれない。ただ、ハーバード大学では、積極的な発信をしているようだ。学校は無論、友達や会社、故郷や国家も、情報が多くてやりとりがあれば、自然に愛情や愛社精神、愛国心も増すが、疎遠になれば愛着も薄れる。

昨年秋、ニーマン同窓会がハーバードで開催された。私も含め多くの同窓生はすでにリタイア。あるいは亡くなってちょっと寂しい会だった。もっと寂しい話。シカゴ・トリビューン紙の論説委員が給料の安さを嘆いていたが、その数ヶ月後の昨年末、経営難からトリビューン紙は休刊になった。彼女は失業。娘にはこの仕事（ジャーナリスト）はさせたくないと話していた。

学びあう日々

竹内 葵
1981 Cornell U./Columbia U.

聖心女子大学・東京大学 講師

雑誌記者時代には、予想もしなかった大学での教職を得て、15年。きっかけは、フルブライト・スカラシップであるのは言うまでもない。主に教える内容が、同じ事柄のニュースやドキュメンタリーであっても国によって取り上げ方が違うといったことを学びながら、各自、改めて日本のメディアや社会について考えてみようという授業のため、学期中は、毎日セカセカと海外ニュースの録画や編集、新聞や雑誌のコピーに追われている。加えてカリキュラムの都合で、英語のプレゼンテーションやディスカッションもあるので、クラスの雰囲気を盛り上げる応援団長も務めなくてはならない。いくつかクラスのエピソードをご紹介し

よう。

ある日の授業（1）　今春NHK教育テレビで放送され話題になった政治哲学者マイケル・サンデル教授の『（ハーバード）白熱教室@安田講堂』を観せて、感想を書いてもらう。「正義」とは何か？公正であるとはどういうことか？道徳的に何が正しいのか？学生たちに議論を挑発する教授のスタイルは、極めてアメリカ的である。例えば学生が身近に考えられる所得格差の問題「イチローの年俸15億円は、オバマ大統領の3500万円と比べた場合、高すぎるか？」について、東大生は、たとえオバマ大統領の42倍の年俸であろうとも、イチローのこれまでの努力や数々の偉大な記録に対して妥当だという意見が、25人×3クラスすべて圧倒的多数で議論にならず残念だった。実力主義の反映だろうか。一方、お嬢様学校として知られる女子大では、『「白熱教室」は、大変に面白かったが、これは、あくまでもエリート同士の議論であり、普通の人々にとって選択肢は二つしかない、善は善、悪は悪なのである…親の庇護を受ける身で偉そうなことを言うものだというのが私の率直な感想である』といった辛口評もあり、教室中に笑いと拍手が巻き起こった。ちなみにこの学生は、大手新聞社の記者内定を貰っているエリート予備軍？なのだが、私は、彼女の反骨精神に期待している。

ある日の授業（2）　BBCのミャンマー総選挙の

ニュースを観て、学生に聞いてみる。「Myanmarではなく、Burmaと呼んでいるのは何故？」学生沈黙して「？」。私「英国外務省は、ミャンマーの軍事政権を認めていないからです。アメリカ国務省のサイトでもBurmaになっています」と言った瞬間、「おぉ～なるほど！」と学生たちの目が輝く。そんな時は、このクラスをきっかけに今後は海外ニュースも観てほしいと願い、準備の苦労も吹き飛んでしまうのである。

一般的に「キーワード的な知識はあっても理解がない」学生が増えているといわれて久しい。昨年、キング牧師の演説“I Have a Dream”を聴いたことがある東大生が40人×3クラス中、どこも1割程度だった時は、「これは、いかん。次世代に伝えねば！」と使命感を新たにした。学生との会話で、日頃ご縁のないアニメやらAKB48について詳しくなる私だが、今日も彼らの知的好奇心を刺激すべく教材作りに励んでいる。

ご提案　八ヶ岳山麓へどうぞ

石渡 裕政
1962 U. of Pennsylvania

鈴鹿医療科学大学・客員教授

私は退職後山梨県の八ヶ岳山麓にある清里に住んでおります。都会からは離れておりますので、ホストファミリーは地理的に無理だと思いますが、海外からのFulbrighterが週末または夏休みなどにちょっと泊りがけで（日帰りも可能です）出かけたいという方のためにお世話することは出来ると思います。日本の山間部の自然を見たり経験したりすることに興味のある方をご案内し、いわゆるホームステイ的なお世話になるかと思います。

部屋としては8畳の日本間と6畳の洋間（ダブルベッド付）を提供できますので、お世話できるのは一度に3人程度かと思います。

東京からの交通：JR中央線の場合；新宿から特急で2時間（小淵沢駅下車）、料金；乗車券（往復）5880円、特急券（往復）2610円、ハイウエーバスの場合；新宿から2時間15分（長坂高根下車）、乗車券（往復）4300円

気候条件等：標高は1000ｍでかなり高いので夏は涼しく冬は寒いところです。この数年は夏も暑くなりましたが、それでもエアコンを使いません。冬は零下10度になりますが、幸い雪は少なくひと冬で数回程度しか積雪はありません。人工雪のスキー場は近くに有りますが、寒いのでかなり良好なスキー場です。

私は趣味でバイオリン制作とその音響学的研究をしており、大体午前中はバイオリン制作、午後は畑仕事などをしております。その他には1年に4-5回程度ですが、社会人（医療技術者および医者）を対象とした講演（レーザーに関する安全問題）を10数年続けております。

第2回 三上フォーラムに参加して

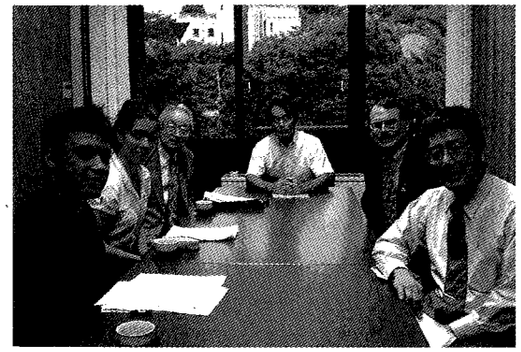
故三上泰永氏（第一回1952年フルブライト留学生・テキサス大、都留文科大学名誉教授）がフルブライト記念財団に寄付された1億3700万円が、米国からの毎年2名の冠奨学金の原資に使われるようになってもう5年が過ぎようとしている。教え子で且つ後輩同僚にもあたる同大学の西出教授のお骨折りで、昨年につづき「第二回三上フォーラム」が7月9日（金）午後4時半から2時間余にわたって行われた。昨年と比して参加者も激増し（正確には2.5倍）、学生の真剣な態度はこの催しが軌道に乗ってきたことを物語るものであった。

最初のスピーカーはアンドリュー・アボドナドさん（北大）「アイヌ民族の人権」、二人目はキアラ・テルスオロさん（神戸大）「日本の伝統音楽、特に琴について」であった。

もともと、アイヌ民族は北海道、南樺太、千島列島の先住民族であった。明治維新後、日本政府はアイヌを集団としてではなく個人として日本国憲法で対応する方針を貫き通してきている。アイヌの人達も、差別の不利をきらって、諸事を曖昧にするようになり、1994年の調査ではアイヌ人口は2万4千人まで減っている。

アボドナド氏によれば、「二風谷（ニブタニ）ダム」での訴訟に即発された不当行為に対して、また最近、国連が世界の少数民族の不利な扱いを是正すべしという大きな流れにそって、アイヌに対する従来の日本政府の方針に異を唱える声が聞こえるようになってきた。

アボドナド氏は、1986年に当時の中曽根総理大臣が「日本は単一民族国家だから教育が行き届いている」と宣したことから説き起こし、アイヌに対する日本語教育の強要で先ず言葉を死滅させ、固有宗教、文化を細らせ、戦後憲法で個人としての権利を表に出し、それを守ることに徹して、集団・民族の色合いを排除してきたと強調した。これに対抗するには、国連をたてて、他の国の例も参照しながら、憲法にまで踏み込んでいくしかないというのが彼の主張であった。しかし、彼が参考にする在日コリアン等と比べると絶対人口数が少な過ぎるのが迫力を欠く。彼はこの研究から、将来、国連で弁護士としてこのジャンルで頑張りたいとの将来像を描いていて、このアイヌ研究がきっかけとなって大成していくかも



しれない。活躍を期待したい。

つぎに演台に立ったキアラ・テルスオロさん。音楽は先ず好きであることが最初にくる。外交官の両親と共に様々な国に暮らし、音楽も幼少のころからバイオリン、ついでフルート、そして最後は自分の声、つまり声楽家の領域で、ある水準までいっているのが、彼女の音楽歴である。それが、ひょんな機会から「琴」と出会い、ほれ込み練習し、他の民族楽器に比べてまだポピュラーな琴について、その現在、未来を研究したいと、本家の日本にやってきた。

彼女は説く：本来、日本では「洋楽」と「邦楽」は相容れない両極を構成してきた。明治以来、学校教育は洋楽、邦楽は学校課外の時間に自分で研鑽に励むものとされてきた。そしてキアラさんは東京を避け、「琴」のメッカ大阪に着目した。家元制度の強固な「山田流」その他を包含する「生田流」は大阪で強い基盤を誇っている。又、洋楽と相性がよい“宮城道雄”は英語文献が多いこともあって、彼女は彼を経由して琴に対する造詣を深めた。

彼女によると東京芸大は400人に一人しか「邦楽」を大学の第2選択科目にしないのに比べて、大阪音大では、大学自体が高価な「琴」を多数購入、貸し出して、大学レベルの研修としては全国で抜きん出ていると、大学・学生の情熱の高さを評価している。民族音楽を大学といった高度教育機関のなかで、どう音楽教育の成果を出していくのか。彼女自身が「琴」に魅入られ、“好き”で習熟し、その熱意で米国でのフルブライト奨学生選抜の難関を乗り切って、日本滞在を有意義に過ごしている熱情がほとばしる素晴らしい講演となっていた。

（大野　熙）

総会講演会

人づくりは未来づくり

江端　貴子（衆議院議員）　1990 M.I.T.

私は、自分の政策の根っこに、「人を守り、人を育て、人を活かす」ということを掲げています。それは、やはりこの日本という国の財産が人材であり、地域、社会あるいは国を活性化させるためには、この人をどう育てていくかということが根幹であると思っているからです。本日は、文部科学委員会に所属している議員として、「人づくりは未来づくり」と題して、お話をさせていただきたいと思います。

1．米国への留学生が急激に減少

まず、最初に私たちはフルブライト奨学金という奨学金制度によって、留学した仲間そしてその関係者でありますから、留学の切り口から、今の教育問題を取り上げてみたいと思います。

既に皆様もご存知のことかもしれませんが、近年、アメリカへの留学生数が急激に落ち込んでいます。細かい数字で恐縮ですが、この10年間で、米国への日本人留学生の数は、ピークの47,000人から、3万人へと、2000年に比べ学部生で52%減、大学院で27%減となっています。私は、90年にフルブライト留学生としてマサチューセッツ工科大学の経営大学院の修士課程に留学いたしましたが、当時は企業派遣の絶頂期、MITでも1学年250人の中で日本人が22人いました。今では3～4人という実態です。4月11日付けのワシントン・ポストによると、ハーバード大学への日本人留学生も15年間減少し続け、09年に学部入学した日本人はたった1人ということです。

なぜ、このようになってしまったのか。一つには、景気悪化により企業派遣や自費留学が減少したこともあると思いますが、若者の「グラスイーター化」も指摘されています。「グラスイーター」とは、積極的に不正を企んだりはしないが、誰かがわいろを提供すれば拒否せずに受け取る警察のことを指す俗語です。ストレスを減らし、危険を避けながら、与えられた環境から楽な方法で最大限の利益を得ようとする人たちのことです。先日、日米教育委員会の留学相談室の方にお話を伺ったところ、相談に来る方たちが異口同音に言うのが、「留学して就職は保証されるのか」「不利になるのであれば行かない」といった意見です。留学して見聞を広めて、グローバルなネットワークを築いて国際社会に貢献したいという気概に満ちた若者が出てこないのです。先日来日されたハーバード大学のドルー・ファウスト総長はワシントン・ポストのインタビューで、「昨年3月に日本を訪問した際、学生や教師が海外で勉強する冒険を選ぶよりも、母国で楽に勉強したがるような印象を受けた」とも語っておられます。

こうした傾向は、大学生、大学院生だけでなく、研究者にも現れています。研究者の留学については、全米科学財団の2008年の数字によれば、アメリカで博士号を取得した中国人は4,526人だったのに対し、日本人は255人にとどまります。中国のエリート校である中高一貫校の北京師範大学付属実験中学では、卒業生の4人に一人が海外の大学に進みます。中国人の研究者のネットワークの強さは脅威ともいえます。国力の源泉となる科学技術を振興するためにも研究者の海外留学は必要ではないか。景気の悪化、若者の‘内向き’傾向の他に、米国留学者減少の背景には、留学後の就職支援が不足しているとの指摘もあります。優秀な学生や研究者が経済的理由により海外留学を諦めているのであればその支援は行っていかなくてはならない。また、海外留学後、就職において適切な評価が受けられるような産業界との連携も求められます。いわゆる国内のポスドク問題も含めて高等教育に今大きな改革が必要とされているわけです。この高等教育をどうしていくかについては、後ほどもう少し触れたいと思います。

さて、それでは、初等・中等教育いわゆる義務教育の段階では何が起きているのでしょうか。今学校現場が直面しているのは、教室内の教育の質といった範囲のことではなく、まさに子どもの貧困、あるいは虐待といった社会問題に向き合わなくてはならない実態です。先日私は、杉並区立和田中学校の前校長である藤原和博先生をお迎えして、シンポジウムを開催いたしました。本日会場にいらっしゃる方々の中にも参加していただいた方がいらっしゃると思います。そのシンポジウムの中でも、子どもを育てられない親、親になってはいけない人が親になっている事実に直面するのが教育の現場だという話がありました。朝、子どもに500円玉1個を渡すだけで、外出してしまい、子どもが不登校でも親に連絡さえ取れない。フィリピン系の母親で父親が失踪してしまい、生活苦から母は子どもを残してフィリピンに帰国してしまった。残された娘2人が苦しさ紛れで男性を引き入れる。こうしたケースは、学校が助ける以外にまったく手立てがありません。住宅街で教育環境が良いと言われている杉並区でさえこうした親（家庭）は1割前後あり、貧困が問題になっている地域では、4～5割いると推計されています。こうした子ども達をどうやって救っていくのかが（本来の教育とは別に）、学校現場の課題になっています。

色々とご批判はありますが、子ども手当ても、こうしたことを背景に、次世代を担う子どもたちの育ちを社会全体で支え、保護者が安心して子育てできるように、0歳から中学校修了までの子どもに対して、月額1万3000円を支給することを6月より実施しています。

それでは、教育全般について、民主党政権はどういう取り組みを行っているのでしょうか。

2．民主党政権の取り組み

民主党の教育への取り組みは、3つのステップを考えています。1番目が経済格差による教育格差をなくすこと、2番目が教育の質の向上、3番目が国と地域の役割分担を考えていくことです。この3つのステップは、一つ一つ積み上げていくということではなく、1番目を実施しながら、2番目、3番目の仕込みを行い、順次実行に移していくことを考えています。順にご説明しましょう。

まず、最初は経済格差による教育格差をなくすことです。民主党政権は「コンクリートから人へ」、「ハードからソフト、ヒューマンへ」をモットーに、「人と知恵」を産み育てる施策に予算を重点配分いたしました。文教予算については過去30年で最高の伸び率である前年比8.1%増加を実施いたしました。このときに、主に取った予算が、高校の授業料無償化です。公立高校の場合には、授業料は不徴収となり、私立高校の場合にも、11万8000円という一定額を助成し、世帯所得によって、250万円以上350万円以下の世帯には、1.5倍、250万円以下の世帯には、2倍の支援を行い、家庭の教育費負担を軽減しました。また、この高校の授業料無償化は、国際人権規約のA規約にある「高等教育の無償化」に一歩近づいたことになります。この規約は条約加盟国160カ国中、日本とマダガスカルの2カ国だけが留保しています。この高校無償化によって、親の経済的理由により高校進学をあきらめざるをえない、または途中で辞めざるを得ないという状態をなくしていきたいと考えて導入されました。しかし、現実は、授業料だけでなく、制服や教科書代、修学旅行代など様々な費用がかかっています。これらの支援についても、給付型の奨学金を含めて検討を進めている段階です。

そして、2番目が教育の質の向上、そのための教員の質と数の確保です。今年度の予算では、教員がきめ細かく子どもと向き合えるように教職員定数を大幅に改善いたしました。4,200人（対前年度5倍強）の増員で、実際には退職される方が3,900人いらっしゃるので純増は300人となりますが、理数教科の少人数指導の充実またはカウンセラーや特別支援教育のための先生の数を増やしました。理数教科については、今子どもたちの理数離れが言われていますが、これはゆとり教育のもとに時間数が減ったこれらの科目が教育指導要領の改訂で増加しました。また現在小学校の先生の8割が文系出身で、自分も数学や科学を専門に勉強したことがない、こういった先生が本当に実験を初めとする授業に対応できるのかということで理数系に強い先生を増やしていこうとするものです。また、実に恐ろしいことですが、教職員の数については、平成17年度を最後に計画がありません。少子化だからということで、自然減に任せて減らしていったというのが実態なのです。私たちは、小1プロブレム／中1ギャップ、不登校等の生徒指導に対応するために、学級編成など、しっかり現場のニーズを見込んで、23年度以降の計画を立てていこうと考えています。

次に教員の質の問題ですが、これについては、教員養成大学院のあり方、教育実習の仕方、養成年数

を何年にするか、これには6年制にするかどうかの議論も含まれます。先に6年制にした薬学部が受験志願者が国立大学で7%、私立大学で31%減ったという前例があり、単純な比較はできませんが、6年制にしたときの経済負担も考え、どういう形が一番いいのかを議論している最中です。また、教員免許の更新問題も含め、先生の質向上のための施策を検討しています。

そして3番目が、国と地域の役割分担についてです。残念ながら、自公政権（小泉政権）下での地方分権は、三位一体改革という名の下、義務教育費国庫負担金が1／2から1／3まで引き下げられました。その結果、国の定める基準まで達する手当てができない地方自治体が出てきたため、教職員の給与費が確保できない県、国の定める基準まで教育費を確保できない県が平成18年度以降、それまで6県だったものが平成22年度には22県まで増加しました。

こうした給与費を確保できないことを反映して、平成14年度から平成21年度の推移を見ると、非正規教員が全体の約4割に増加しています。非正規教員は、週に何コマか教えるということで、掛け持ちをしている場合もあります。また、そのコマだけの関わりで、十分に生徒に接することもできません。こうした状況は、教育の質の低下や、教員が授業に臨むにあたり十分な準備時間を確保できない等の弊害をもたらしかねなくなっています。

そこで、もう一度、地方公共団体の自主性を高め、地域の特性にあった自治の在り方を図るため、国と地方の役割分担を見直そうということが議論されています。地域住民にとって身近な行政を、できる限り身近な地方公共団体が処理することが望ましい。地方分権推進法の基本方針に即しながらも、地方分権推進委員会勧告を最大限尊重して、地方分権の推進を図ろうという流れです。一つの例としては、かねてより大阪府橋下知事が文科省に求めていた「教員人事権の市町村への移譲」が今年の4月末、実質的に認められました。現行法は変えずに、都道府県が条例を制定することによって、①県費負担教職員の任命権、②県費負担教職員の市町村別の学校の種類ごとの定数の決定権、③学級編成基準の決定権を市町村に移すことが可能となりました。これは、全てに、普遍的に適用できるものではないのですが、国と地域の果たす役割についての一つの形となりうるといえましょう。

もう一つ、私たちが地域を考える上で重要なのが、「新しい公共」という概念です。「新しい公共」とは、

公共を、官だけでなく企業やNPOをはじめ民間のさまざまな主体と行政が連携していくことです。官だけでやるには、大きな政府となり、コストもかかりすぎる。しかし、民だけで行うと、短期的な視点での利益確保や行き過ぎる競争が起こり、教育や介護や子育ての現場で、結局弱者が切り捨てられてしまう。これを防ぐために、地域の様々な力を公益に変えていこうという流れです。先ほども話に挙げました、杉並区立和田中学校をモデルに、2008年度から文部科学省が50億円の予算を投じて学校支援地域本部事業を立ち上げ、まさにこの「新しい公共」を教育という切り口で実践しています。この学校支援地域本部では、地元のコーディネーターが中心になって、放課後の勉強やクラブ活動を支援したり、学校内の庭木の手入れや整備をしたり、こうしたことを百数十人という地域のボランティアの方々を中心に行っています。この活動の支援を予算と人材育成でどう行っていくかを、またこのような仕組みを円滑に進めていくための法整備の検討を進めています。

今、子どもたちを取り巻く環境では、「ナナメの関係」が求められています。教師と生徒、親と子といった「タテの関係」や、同じクラスの友だち同士のような「ヨコの関係」ではない、異なる立場に立った人との間に結ばれる、自由で個別的な関係、昔でいえば、八百屋や魚屋のおじさんが店先で声をかけてくれたり、近所のおじいさん、おばあさんが時には叱ってくれたりという関係がありました。「ナナメの関係」は、子どもたちにとっては、評価されたり成績をつけられたりすることのない、利害関係のない第三者との関係。だからこそ、行き詰まった子どもの世界を広げ、居場所に幅を持たせてあげることができるということで、この子どもを育てる環境をみんなで作り上げていくことも大事なのです。

3. 高等教育の見直し

さて、今まで留学生の現状から、小中学生の教育の問題、それに対する民主党政権の取り組みについて話をしてまいりました。こうしたことは、今文部科学委員会の委員を中心に、①初等中等教育、②高等教育、③科学技術、④スポーツ、⑤文化・芸術の5チームに分かれ、方向性、優先順位、来年度の予算について議論をしている最中です。私は、高等教育チームで副主査を務め、科学技術チームにも入っております。

高等教育のチームで議論されていることの主なものは、今の大学のあり方です。現在日本には、国公立大学が163校、私立大学で595校の大学があります。一昨年から全入時代と言われていますが、この数が適正なのか、また研究を主体とする大学、実務教育を中心とする大学、地域の方々に一般教養を提供する大学など、少しカテゴリー分けをした方がいいのではないかといった意見もあります。その議論の前提としては、世界と伍して戦えるトップ大学の育成と、地方大学及び一般的に社会を支える大卒の底上げとを両輪で考えていくということも考えています。

この大学の質の確保が中身の議論とすると、その入り口と出口の議論もさかんです。入り口というのは、受験です。この大学受験が、その下の高校教育、中学、小学校さらには幼児教育にまで影を落としていることは事実です。少子化もあり、近年特に私立大学においては、志願者を集めることが経営上の大きな課題であります。その結果何が起きているのか、数万単位で受験する学生の答案を数日で合否発表しなくてはいけないとなると当然マークシート方式、そして差をつけるためには、非常に細かいことを質問して違いを出すということになりがちです。このことがじっくりと論理思考などを試す試験ではなく、知識偏重の試験に結びついているのです。こうした受験の見直しも議論に含めています。

そして、出口の問題というのは、就職の問題です。大学で身につけるべき就業力は何なのか、本来それは大学で身につけるべきものなのか、大学3年生から始まっている就職活動、実態として2年くらいしかまともに勉学に向き合えない時間の確保をどうするのかといった観点でも大学のあり方を議論しています。雇用では、正規雇用、非正規雇用の問題が大きくなっています。同じ仕事をしていても、非正規だということで、正規雇用の半分あるいは3分の1の給与しかもらえない。こうした格差をなくしていくためにも、同一労働同一賃金が言われているわけですが、これを実現するためには、その前提として、仕事のレベルが共通認識としてなくてはなりません。そこで、NVQ（National Vocational Qualification）、仕事や職種のレベルを決めていくことも厚生労働省と共に議論されています。この職業能力評価制度を入れることによって仕事のレベルを決め、ひいてはその仕事につくために大学としては何を学べばいいのかといった基準作りをしていこうという動きです。

さらには、大学の国際化の問題、ここには当然留学生の受け入れの問題、また先ほどお話したこちらから留学する問題を含みます。東アジア共同体というコンセプトもありますが、アジアのそして世界でのリーダーをどう育てていくかということも、考えていかなくてはなりません。アジア諸国から日本にやってくる留学生が急増している反面、日本からアジア諸国へ留学する人数はまだまだ多くありません。我が国の国際競争力を強化する上でも、優秀な日本人学生がアジア諸国で活動できるようにしていくことも求められます。また、欧州では「欧州高等教育圏」の構築を通じて、教育の質の保証のための共通の枠組みづくりが進んでいますが、日本も国際競争力を高めつつ、国際的な観点から質の保証を確保することが重要です。ヨーロッパのエラスムス計画のようなものを東アジアにも考えていくのかなどの検討も端緒についたところです。インバウンドの受け入れをどうするのかという問題もさることながらアウトバウンドの海外留学の推進も必要なのですが、残念ながらアウトバウンドに使われている予算は10億円以下となっています。若者の意識を変えると同時に、こうした経済的な支援も行っていくことが必要です。

こうした中長期の議論に加えて、来年度の予算をどうするかということが直近の課題です。来年度の予算は、民主党政権になって、初めて最初から策定する予算です。今までのように各省庁が持ってきた概算要求を調整するのではなく、最初にガイドライン、何に予算を重点配分するのか、それに基づいて概算要求を出してもらうという、従来のボトムアップ型からトップダウン型に予算編成が変わります。こうした議論をしっかりと進めることによって、ムダな道路やハコモノに予算をかけるのではなく、人、特に教育にしっかりと中長期に渡って予算を入れていく、そうした形に変えていくのが、私たち議員の務めだと思っております。

雑駁な話となりましたが、これにて、私のお話を終了いたします。ご清聴ありがとうございました。

総会報告および決算

2010年6月9日、市谷私学会館「赤城」の間で東京フルブライト・アソシエーションの総会が開催された。長坂健二郎会長の挨拶があり、議事進行。決算、監査報告、役員人事、会則改訂、2010年度事業計画など、滞りなく進行。TFA事務局の部屋が地下から4階に移ったこと、事務局人件費の一部を日米教育委員会が援助してくれていることへの感謝の言葉があった。

2012年には日本でのフルブライト計画60周年の行事があり、何をやるか、そのための募金活動について。また、会員数の減少を食い止めるためにも、今年度から新人グランティーは留学前に同窓会会員になってもらうことになった。会費は帰国時から納入する。

長坂会長が任期満了で退任し、佐藤ギン子さんが会長に、原田敬美氏が会長代行に就任することが発表された〔原田氏の監査役後任は小川富由氏〕。長坂会長は退任挨拶として、この4年間で取り組んだ主な課題として、①同窓会会員数をなんとか増やしたい。②年齢構成が高齢化して、不活発になった活動を活性化したい。その2点を挙げた。①については、アメリカ国務省に頼んで50万ドル増（20%増）の出資を得、日本政府からも6000万円増を得た。これでグランティー数が20人増になり、そのうちの10人をビジネス界からの別枠とし、従来のアカデミア偏重の傾向を正す、という。②に関しては、前回の総会の講演会を公開とし、盛会であったこと。またその他のイベントも盛況で、やや活性化の兆しが見えること。さらに活性化に努力していきたい、と語り、「皆様のご支援、有難うございました」と締めくくられた。

江端貴子衆議院議員による講演（6ページ参照）が「鳳凰」の間で行われたあと、「大雪」の間で懇親会が開かれた。福田学氏（アラムナイ・ミーティング委員長）の司会で、新会長・佐藤ギン子さんの挨拶があった。「まことに心細く、非力ですが、皆様のご支援とご助言をよろしくお願いいたします」

そのほかにもアラムナイ・ミーティング委員会副委員長に岩澤知子さん、ホスピタリティー委員会副委員長に松島たかねさんが新任され、TFAにもいよいよ「女性の時代」が芽吹きつつあるかのようだ。

佐藤会長から講演をしてくれた江端貴子さんに御礼としてフルブライト・スカーフが贈られた。江端さん、「有難うございます。開けてみていいかしら。あら、素敵。桜ですね」とさっそく着用。「似合うよ」と言われて嬉しそう。

行天豊雄氏（国際通貨研究所理事長）が乾杯の音頭。挨拶で、「いまから55年前、25歳のとき、不安と期待と高揚した気持ちで船出したことを思い出す。まさに360度未来がひろがっているという実感だった。江端さんの話にもあったように、いまの若者が未来360度の夢を持っていないというのを不安に思う。平均年齢が高くなり、われわれは絶滅品種化しつつあるが、まだまだやるべきことはある」と。

歓談に移り、食事をしながら、アメリカン・グランティーも交えての交流の輪が広がった。中締めは元会長の開原成允氏。退任する長坂前会長に花束贈呈のはずだったが、長坂氏が退席されてしまったので、代理で賀来景英氏が受け取る。賀来氏も日米教育交流振興財団の理事長を今期で退任された。

（文責　松尾秀助）

会長として最後の挨拶をする長坂健二郎氏

2010年度総会での各種報告

2010／2011年度役員（敬称略）

●会　　長：佐藤 ギン子
●会長代行：原田 敬美
●副 会 長：千本 倖生、竹内　洋、住田 良能、森本 泰生、金田　新、グレン S. フクシマ
●監 査 役：小川 富由
● Alumni Meetings　委 員 長：福田　学
　副委員長：神戸 伸輔、岩澤 知子
● Hospitality Committee　委 員 長：島田 道子
　副委員長：外池 滋生、山田 真之、大倉 健太郎、松島 たかね
● Publicity　委 員 長：松尾 秀助
　副委員長：今井 章子
● Foundation Liaison　委 員 長：原田 敬美（兼務）
●顧　　問：渡辺　宏、行天 豊雄、橋本　徹、金子 尚志、開原 成允、南原　晃、有馬 朗人

2009年度決算・2010年度予算比較表

（単位：千円）

	2009年度決算	2010年度予算
Ⅰ　収入の部		
会費	4,094	4,500
寄付金	3	0
受取利息	14	13
募金手数料	825	567
ＰＣ賃貸料	120	120
広告料収入	300	300
雑収入	0	0
当期収入計（A）	5,356	5,500
前期繰越	15,924	14,832
収入合計（B）	21,280	20,332
Ⅱ　支出の部		
給料手当	1,753	1,850
水道光熱費	149	170
旅費交通費	250	260
通信費	1,178	1,600
地代家賃	330	376
事務用品費	47	80
会合費	1,195	540
会議費	111	120
奨学生費	286	300
印刷費	836	900
什器備品	180	130
修繕費	0	50
消耗品費	58	40
倉庫料	9	50
支払手数料	13	20
図書購入費	0	60
雑費	7	50
損害保険	4	5
保守点検費	42	42
予備費	0	200
当期支出合計（C）	6,448	6,843
当期収支差額（A）－（C）	－1,092	－1,343
次期繰越（B）－（C）	14,832	13,489

2009年度会務報告

09.05.13（水）第17回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］中尾 武彦 氏　財務省国際局次長
［テーマ］「国際金融危機の構図と対応」
［出席者］会員他31名

09.05.19（火）米国人ニュー・グランティーのための国会および最高裁判所見学ツアー［国会：津島 雄二 議員］
［最高裁判所：堀籠 幸男 判事］
［参加者］米国人ニューグランティー・家族7名、関係者6名、合計13名

09.05.27（水）2009年度第1回東京フルブライト・アソシエーション定例役員会（於ホテルニューオータニ）

09.05.27（水）2009年度総会・講演会・懇親会（於ホテルニューオータニ）
［講師］原　丈人 氏　デフタ・パートナーズ・グループ会長
［出席者］会員・家族61名、招待者25名、合計86名

09.06.26（金）2009年度第1回日米教育交流振興財団理事会・評議員会（於フルブライト・ジャパン会議室）

09.06.26（金）第18回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］千野 境子 氏　産経新聞社特別記者（元論説委員長）
［テーマ］「日本観・世界観・私観～女性記者の道拓きつつ40年～」
［出席者］会員15名

09.07.18-20（土～月）日光・宇都宮・烏山ツアー＆ホームステイ
［参加者］米国人ニューグランティー他12名、同行者2名、計14名

09.10.19（月）第34回日米交流チャリティ・ゴルフ大会（於戸塚カントリー倶楽部）
［参加者］151名
［募金額］389万円

09.10.29-11.01（木～土）世界フルブライト・アソシエーション第32回年次総会（ワシントンDC）に会員2名参加　大野熙事務局長と福田学 Alumni Meetings 委員長

09.10.29（木）第19回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］泉　宏 氏　政治ジャーナリスト
［テーマ］「民主大勝・政権交代から来年の参院選まで」
［出席者］会員他21名

09.11.06（金）米国人ニューグランティー歓迎会（於大手町サンケイプラザ）
［出席者］ニューグランティー・家族13名、招待者18名、会員・家族43名、合計74名

09.11.23（祝）第6回鎌倉ウォーキング・ツアー
［参加者］米国人ニューグランティー同伴者13名、会員・家族28名、計41名

09.12.16（水）ニューズレター Vol.22 発行

10.02.25（木）2009年度第2回東京フルブライト・アソシエーション定例役員会（於フルブライト・ジャパン会議室）

10.03.19（金）2009年度第2回日米教育交流振興財団理事会・評議員会（於フルブライト・ジャパン会議室）

アンケート特集 フルブライト同窓会 各地区の現状と活性化への方策を探る

前年号の特集で、「若手フルブライター体験者は何を考えているか？」について報告した。それはフルブライト同窓会活動が会員高齢化や若手フルブライターの同窓会入会率低下などによって、年々、固定化、非活性化へと進んでいるという危機感から、若手フルブライターたちはなぜ同窓会活動にあまり参加しないのか、を探ってみようとの試みだった。

2007年に答申されたヴィジョン委員会（原田敬美委員長）による報告書は、「東京フルブライト・アソシエーション（TFA＝全国同窓会と東京首都圏同窓会を兼ねる。ここでは全国同窓会）活性化のため、活動の現状を分析し、様々な方策を提案する」ことを目的としていた。今回は、さらに具体的に現状を把握するためにアンケート調査を行った。対象は各地区同窓会（国内11地区とNY）と「建築・土木・都市・環境同窓会」「ジャーナリスト同窓会」の合計14の同窓会あてに、下記のような質問をした。

1) 貴地区同窓会の現状をお教えください。会員数（男女別、年代別など）、定期、不定期の同窓会活動（総会、講演会、その他イベントなど）について。
2) 同窓会活動運営上、大きな問題点は何ですか？運営主体（会長、幹事など）が抱える問題、連絡上の問題（個人情報保護法の壁）、資金的問題、地域特有の問題などなど。
3) 若年層、女性層を活動に組み入れるために、何かアイディアはありませんか？　（例＝「平成フルブライターの会」「女性フルブライターの会」など）。
4) 東京だけに集中せず、たとえば地区同窓会とTFAとが共同で講演会などを順次各地で開催する、といった取り組みもありうるかもしれません。その他なんでも結構です。活性化へのご意見をお聞かせください。

10月中旬現在で12地区・分科同窓会から回答が寄せられた。その中から、3地区と1分科同窓会を選んでさらにもう少し突っ込んだインタビューを行った。その結果を以下にご報告する。

■会費納入会員数は1500人、納入率50％

同窓会の総会員数は、ヴィジョン委員会の報告書によれば3000人前後で推移している、となっているが、実際のところ、TFA事務局でも正確な数字は把握していない。それは古い時代の方々は手続き上、同窓会に入会しているかどうか、明確でないことと、消息が明らかでない会員も少なくないからだ。会費（年3000円）収入が年間約450万円だから、会費を納入している会員が1500人はいるわけで、納入率は50％ということになる。

会員数からすると圧倒的に多い東京首都圏は、会員数2468人（男女比＝78％：22％）、会費納入率は平均44％という回答があった。総会（講演会を含む）、セミナー、日米新フルブライター歓迎会、ゴルフ会、その他ホスピタリティー委員会の諸活動などは全国同窓会の活動と見るべきで、東京首都圏の同窓会独自の活動というものはない。

東北同窓会からは、会員数の回答はなかったが、「（JUSECから得た）東北関係のフルブライターのリストに拠りながら当同窓会未入会の約70名に、入会依頼文書と返信用はがきとで、ないしは、メールで入会依頼をしました。その結果、約20名から返答があり、約15名が入会して下さるとのことです」（事務局担当・藤井建人氏）ということだ。

この事実はきわめて重要で、全国でもとくに若手フルブライターで未入会だが、誘われれば入会してもいいという人が潜在的にいることを示している。今年度からはフルブライターに選抜され、研修会などに参加した時点で同窓会への入会文書に署名してもらうことになり、ほぼ100％近いサインが得られた（会費納入は帰国後。もちろん退会は自由）。それ以前のフルブライターにも各地区でリストをJUSECから入手して入会を募ったら、かなりの入会者がありうるのではないだろうか。TFAとJUSECとが協力して、この作業を全国的に進めることを提案したい。

なお、東北同窓会は通常は年末12月に総会と懇親会を開催するが、昨年度は遅れて今年8月1日に行い、7名の会員が出席。懇親会にはアメリカン・フルブライターなども含め12名が参加したという。

中部同窓会（星野靖雄会長）は123人に（中部同窓会独自の）会報を送付しており、これが実質会員数。定期総会、例会を開催しており、会報も発行して、活発である。2009年度から日本語・英語のホームページも開設し、会報「Fulbrighter in Chubu」の第1号から最新号まで掲載し、TFAの「Newsletter」も第1号から最新号まで載せている。さらに入会申込書もホームページにあるので、常に新会員をリクルートしているわけだ。特別講演会はイーストウェストセンター中部同友会と共催で開催し、一般市民にも無料で公開している。

また「帰国したフルブライターの名簿、連絡先をTFAのホームページで掲載していただくと助かります」とのこと。各地区でのイベントについて東京、中部のホームページに掲載して参加を勧誘することを提案。メールを活用して、各地区同士のコミュニケーションを図るべしとの提言も貴重だ。

北陸同窓会（藤原哲也会長）は会員数約30名。そのうち2年に一度の総会に参加するのは10名程度とのこと。60歳代が多いが、役員は40代でがんばっている。総会以外にも年一度ほど、北陸に来ているフルブライターか、フルブライト計画で来日している研究者などによる講演会を開いている。

悩みは参加者が少ないために役員が固定化してしまうこと、高齢化で会員数の自然減少と弱体化が止まらないこと。また北陸地方に在住のフルブライターの実態が分からないという。これはJUSECなどの協力を得れば、東北同窓会のように新加入の道は開けるかもしれない。

「北陸は規模が小さいので、どうしても活動の規模も制限されていますが、他の地区とのコラボレーションも面白いと思います」と藤原会長は言う。東京から講師を派遣して各地区を行脚してもらうという案も。また、「フルブライター間の交流だけでなく、地域の国際交流の機会に積極的に参加することも、フルブライトの理念に叶う」と、意欲的だ。

東京首都圏についで規模が大きな大阪地区同窓会（清澤悟会長）は会員数320名、男子が80％。同窓会活動に関心のある年代は平均70歳、全体では50歳平均か、とのこと。どの地区でも同じだろう。会員の新規加入はこの5年間なし。年会費納入は90名ほどで、財政赤字化が問題だと清澤会長は言う。

実働会員減少を補うために行事への案内を本人のみならず家族、友人にまで広げた。また、近畿地方に来ている米国人フルブライターの歓迎会を開催し、すべての同窓会行事にも招待している。アメリカ領事館スタッフも参加して、日米間、またアメリカ人同士の交流にも役立つ場となっているという。「帰国から間のないフルブライト留学生に昨今の留学事情を発表してもらったりすれば、既存の会員も興味が出て、会への参加が高まるのではないか。また、他地区に来ているアメリカ人留学生を呼んでホームステイしてもらい、交流すれば親睦を深める機会にもなると期待します」（清澤会長）

大阪は2000年から事務局機能をアウトソーシングし、年30万円で委託している。従来は会長のオフィスで代行していたため、会長が替わるたびに連絡先が変わって不便だった。（大阪同窓会はTFA会費以外に年5000円の会費を徴収）　関西日米交流フォーラムとタイアップしたり、アメリカ領事館の催しに参加することによって同窓会の懇親も図るなど、他グループとのコラボレーションを積極的に進めているのが特徴だろう。

■海外留学への意欲が薄い若者

中国地区同窓会（木村榮一会長）は会員98名。毎年6月に米国人フルブライト国際教育交流プログラムInternational Education Administrator（IEA）の人々が広島市を訪れるのを機に歓迎会を兼ねて同窓会員が集まるのが唯一の定期的な行事だという。その出席者も10名くらいの常連に固定化してしまっている。

問題なのは留学への関心が低くなっていることだ、と木村会長は言う。「私が属していた広島大学でも、大学、学生ともにフルブライト留学に関心が低いと思います。中国地区どこの大学でも、外国の大学からの留学生受け入れ、学生交換など熱心ですが、フルブライト留学生として送り出すところまで配慮・努力しているところはないでしょう。また、身近に留学体験者のいないことも無関心につながっています」

これは当節よく言われる若者の「内向き志向」という社会現象でも説明できるだろうが、フルブライト・プログラム全体にとって重大な問題である。フルブライター体験者である同窓会員が全国で機会あるたびに、「フルブライト体験のすばらしさ」を若者たちに語り続けなければ、われわれが享受したあの貴重な時空の思い出も儚いものになってしまう。

四国地区同窓会も、「このままではジリ貧傾向は止まらないと悲観的であります」（太田英章会長）と現状報告してきた。会員数は56名。うち女性13名。60歳代～80歳代が過半数を占め、「皆さん、留学から相当年数が経過し、高齢化のせいもあってか、関心は高くありません」。何らかの契機があるときに2年に一度程度、総会を開くという。それでも会費は年3000円で納入率50％というのは立派なものではないか。JUSECやTFA等からの支援があれば、もう少し活性化する可能性がある。

その一例として特筆すべきなのは、昨2009年11月に日米教育委員会事務局長のサターホワイト氏らも出席して行われた総会だ。時同じく香川大学創立60周年の記念講演会のために高松市に来られた明石康氏（元国連事務次長・フルブライター）も交えた懇親会は大いに盛り上がったとのこと。あらゆるチャンスを捉えて地区同窓会を開催し、東京からも参加・支援し、交流を広げれば活路は開かれる。

九州同窓会も同じような現状だ。会員数こそ121名と四国の倍以上だが、「新規加入者がほとんどなく、物故者や高齢等の理由による退会者が毎年増えているため、会員数が減少している」（事務局担当・河野氏）という。年1回、役員会、定期総会、講演会、懇親会（同日開催）を開く。

「会員の声の中で、毎年マンネリ化しているので、著名な人等の講演会をすればよいとの意見があるが、本同窓会だけではいろいろな面で難しいため、東京や各地の同窓会との共同開催ということが叶えばとても良いと思う」（河野氏）

たしかに著名人を講演に呼ぶことは資金的な負担が大きい。その解決方法は何だろう？　TFAから著名フルブライターに依頼し講師として派遣、各地を行脚してもらうということで、各地の費用負担を軽減するという手はあるかもしれない。現在、東京でやっているセミナーの地方版だ。

■沖縄は「ガリオア」同窓会

さて、沖縄同窓会は他の地区同窓会とは成り立ちからして大きく異なる。戦後から1972年に本土復帰するまでの27年間にアメリカ留学した人は1000人以上にもなる。が、それは米国陸軍省のガリオア奨学資金によるもので、復帰後はフルブライト・プログラムが適用されるようになったが、限られた分野で人数は少ない。「だから沖縄の場合は『ガリオア』の名称は省けんのですよ」と比嘉幹郎会長は語る。「ガリオア・フルブライト沖縄同窓会」という

新しいグランティーはまず全員同窓会員に

のが正式名称である。「やはり歴史的事実は大事に継承されるべきだと思います」

現在、約600名の潜在会員がいると思われるが、毎年2月の新年会、7月の総会・懇親会には30名ほどが集まる。年会費はなく、受益者負担ということで出席者から5000円を徴収する。

「このままだと同窓会は消滅すると懸念されるので、10年前の沖縄G8サミットを契機に同窓会がスポンサーになって沖縄アメリカ協会を創設しました。この協会は、アメリカと何らかのかかわりがあり、関心がある方は誰でも入会できる。いまは両方の会長を私が兼務していますが、だんだん沖縄アメリカ協会の出席者が多くなってきたので、会長も新しく選出してもらおうと考えています」（比嘉さん）

比嘉さんは留学生または交換教授としてアメリカで延べ13年間の滞在経験があり、琉球大学教授から沖縄副知事を6年間務めるなど、多彩な経歴の持ち主。沖縄留学生の記録を本にするなど、ガリオア留学や沖縄・アメリカ関係の生き字引的存在だ。フルブライト・アソシエーションとは成り立ちが異なるものの、より実質的な交流を求めている。

地区同窓会としては、ニューヨークにJapan-U.S. GARIOA/Fulbright Alumni Association Inc.という組織があるが、「ほとんど無活動の状態です」（林啓一郎・会長代行）。

なぜなら、「若い人たちは、大学同窓会とかに参加する方が、職務上利益になるようで、フルブライトのような特殊な会には興味ないようです。またニューヨークのような所は高齢化が進み、会員の消息がつかめない現状です」（林氏）

ただ、「ウェブサイトの良いものを作り、インターネット上で会員同士の交際ができるようにするのも一案」と言う。林氏が属しているニューヨーク日系人会でシニアのために便利に作ったサイトがあり、日系新聞がすぐつながる目次をつけたりした。これに会員個人連絡などのプログラムをつけるといいのでは、と提案している。

さて、以上の地区同窓会のほかに、原田敬美氏が代表世話人を務めている「建築・土木・都市・環境同窓会」という業界分野での同窓会がある。会員数は約70人。女性は2名。幹事は持ち回り制。原則として年1回の同窓会を開催している。「東京でやってますが、結構、九州、名古屋、新潟などからこの会のために来られるメンバーもいますよ」（原田氏）

会を立ち上げたのは1993年。JUSECからの要請もあって建築を中心に、関連のある分野を集めた。同窓会名簿からピックアップして名簿を作ったが、個人情報保護法以来、難しくなったという。

原田氏は現在、TFAの会長代行であり、長く同窓会活動の中枢で活躍してきた。ヴィジョン委員会の委員長として報告書を起草もした。今年度からフルブライターに選抜されると同時に同窓会に入会する文書にサインを求めるという改革を実行したのも原田氏たちだ。「TFAを就職、情報交換などヒューマン・リソースとしてご活用ください、ということです。そのためにご紹介はTFAが責任を持っていたします、という宣言です」（原田氏）

単なるサロンではなく、実益もある同窓会に、というコンセプト。弁護士、会計士、MBAなど他業種のグループ化もあっていい。若手や女性のグループ化も、実益がある会ならば集まるだろうと言う。

「ジャーナリスト同窓会」というものもある。1998年度の名簿によれば、ジャーナリスト・フルブライターは120名ほどいるが、「ジャーナリスト同窓会」は小グループから自然発生的に生まれたもので、会長や事務局機能もなく、「そろそろ一杯やろうか」と誰言うでもなく数年に一度の頻度で集まっている。前回は2008年に15名の会員と、アメリカン・グランティー、さらにJUSECからも参加してもらって賑やかに懇談した。他の同窓会とは異なるが、こうしたゆるい組織もあっていいのかもしれない。

■現状の問題点と改革への希望

以上、アンケートへの回答とインタビューを中心に報告した。明らかになった現状における問題点は、

・会員数の減少（とくに若手フルブライターの加入率の低下）、
・会費（全国同窓会と地方各地同窓会）の納入率低下による財政難、
・連絡方法の難しさ（名簿が作りにくい、ネットだけではカバーできない煩雑さ）、
・講演会、イベントのマンネリ化……などが共通したものである。

一方、東北同窓会で行った新規入会の勧誘によって15名の新会員を獲得したということは、全国規模で展開すれば、かなりの数の潜在的新規会員をリクルートできる可能性を示しているように感ずる。今年度から、選抜されたフルブライター全員に同窓会への入会文書にサインを求めるシステムになったこととともに、会員数の減少傾向に歯止めをかけるきっかけになることを願う。

フルブライター同士の交流だけではなく、地区の国際交流チャンスに積極的に参加することによって、フルブライト・プログラムへの認知度を高め、ひいては若者の海外留学挑戦への刺激になる可能性もある。沖縄のように、同窓会がリーダーシップを発揮して地区アメリカ協会を立ち上げ、広く門戸を開けて、会の共同開催などコラボレーションを進めることは、フルブライト理念に叶うものだろう。

フルブライターがアメリカで受けた貴重な経験への「恩返し」という大義名分もさることながら、原田氏が言うように、若者や女性を同窓会活動に参加させるには、ある程度、実質的な利益が必要かもしれない。就職、情報交換などのヒューマン・リソースとして同窓会の人脈を利用してほしい、そのためにはTFAが積極的に紹介の労をとる、というシステムが取り入れられたことは、その方向に沿ったものだろう。

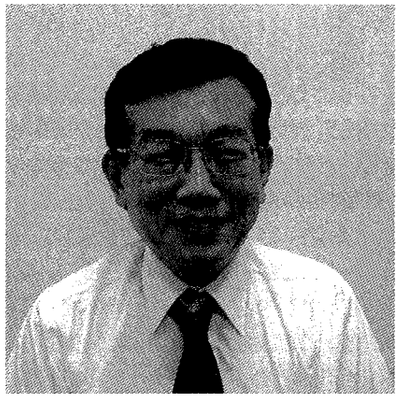
地区同窓会と東京との関係をより密接なものにする必要を感ずる。苦闘している地区を積極的に支援するためには、どんな方法があるだろうか。講演会講師の紹介・派遣もその一つ。ホームページなどを利用した情報の告知、新規フルブライターの動向報告などが考えられる。ただし、サイトの運営・管理にかかる人手、会員向けのクローズドなサービスの作りこみなどは現在のTFA事務局の要員・資金では難しい。専門的知識とスキルを持つ会員の助力が求められる。

以上の結論めいたことは、ほとんど「ヴィジョン委員会報告書」（2007年）に述べられている。その具体例を各地区同窓会に則して報告した形である。このアンケートとインタビューにご協力くださった各地区同窓会の方々に感謝し、同窓会活動がより活性化されることを願って、報告を終わる。

（パブリシティー委員会　松尾秀助）

ガリオア・フルブライト同窓会の活動

フルブライト中部同窓会



会長　星野 靖雄
1981 Rutgerts University
1990 University of Missouri, Columbia
愛知大学会計大学院教授、筑波大学名誉教授

2010年度のフルブライト中部同窓会総会は、5月23日に開催されました。総会議事録と写真は中部同窓会のホームページに掲載されています。

総会につづき講演会とし、2つの講演を日本イーストウェストセンター中部同友会と共催しました。最初の講演は、加瀬豊司 四国学院大学名誉教授による「アメリカの大学院教育について」でした。加瀬先生は、定年で大学を離れられ名古屋に戻って中部同窓会に加入されたところです。米国での修士取得と日本での休暇中に長年にわたりメリーランド大学へ何度となく通われPh.D.を取得されたとのことでした。詳細は中部同窓会のホームページをご覧ください。

なお、HPには会報（The Fulbrighter in Chubu）もNo.20まで掲載されています。ただし、紙媒体での会報には、住所変更を含む会員の近況報告と中部同窓会の会員の名簿・住所なども入っていますが、HP上では、これらについてはパスワードをかけており外部からは見られなくなっています。WEB上でご覧になりたい方は、中部同窓会事務局までメイルでパスワードを問い合わせてください。

さて、2番目の講演は（株）デンソー基金の冠Fulbrighterとして金沢大学教育学研究科に1年所属し、その後三重県志摩市での英語教育に従事しているステルツア（Andrew Steltzer）さんによる「日本での生活について」でした。彼とは2009年7月に（株）デンソーへ、愛知学院大学の今光名誉教授と表敬訪問したこともあり親しみやすく、日本語もかなり上達しているようでしたが、講演は英語で行われました。詳細はHPをご覧ください。

フルブライト中部同窓会の講演と懇親会は、昨年に続き日本イーストウェストセンター中部同友会と共催にしています。その理由は、Fulbrighterの中にイーストウェストセンターの同友会会員がかなりの数いて、別々に実施するより好都合である点にあります。どちらも、米国政府による国際交流のプログラムですし、State Alumni Associationにも他の日本の6団体とともに両方登録しています。これらは、沖縄での3団体とイーストウェストセンター東京、関西とフルブライト東京です。

さらに、中日新聞他の新聞の市民欄に講演会を宣伝し、一般の方にも講演会と懇親会は参加できるようオープンにしています。

懇親会も大学のカフェラウンジを使い2,000円と安く設定しています。また、留学生にも参加していただいています。

フルブライト中部同総会ホームページ
http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html

日本イーストウェストセンター中部同友会ホームページ
http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/EWC.html

State Alumni HP
https://alumni.state.gov/landing-page

2010年度財団奨学生冠名リスト

採用者数：
Fulbright Fellows（Recent B.A.）…FF　7名
Graduate Research Fellows（Graduate Students）…GRF　3名
Graduate Students - Japanese…GSJ　1名

冠　名（敬称略）	奨　学　生　名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. 三上基金	DE KONING, Philippe B.	FF	広島大学（国際関係）	Stanford U.（International Relations）
2. 三上基金	LECLAIR, Jessica E.	FF	京都大学（環境学）	Williams College（Ecology）
3. 志野基金	KUSHELL, Michael G.	FF	愛知県立大学（民族音楽学）	U. of California, Berkeley（Ethnomusicology）
4. TFA-1	DAHL, Jessa K.	FF	長崎大学（歴史学）	Knox College（History）
5. TFA-2	RIGANO, Louis	FF	森林たくみ塾（建築学）	Rhode Island School of Design（Architectual Design）
6. TFA-3	ROCKQUEMORE, Angelica S.	FF	大阪学院大学（美術史）	Pacific U.（Art History）
7. TFA-4	WELLS, David L.	FF	九州大学（経済学）	U. of Michigan（Economics）
8. 三菱グループ	GRUNOW, Tristan R.	GRF	法政大学（日本史）	U. of Oregon（Japanese History）
9. YKK	SEEBRUCK, Ryan M.	GRF	静岡大学（社会学）	U. of Arizona（Sociology）
10. TFA-5	LOWE, Bryan D.	GRF	大谷大学（宗教学）	Princeton U.（Religion）
＜Japanese＞				
1. YKK	古井　義昭	GSJ	Emory U.（American Literature）	東京大学大学院人文社会系研究科（英語英米文学研究室）

日米教育交流振興財団の状況

○下記ホームページ、日米教育交流振興財団『ディスクロージャー資料』にて、次の資料を公開しております。
http://www.fulbright.or.jp

1）寄付行為　2）役員名簿　3）事業報告書　4）貸借対照表　5）正味財産増減計算書　6）財務諸表注記　7）財産目録　8）収支計算書　9）収支計算書注記　10）独立監査人の監査報告書　11）監査報告書　12）事業計画書

財団法人 日米教育交流振興財団・地区別役員等　（敬称略）

地　区	顧　問（3）	理　事（23）	監　事（3）	評議員（23）	審査委員（11）
北海道			高向　巌	熊本　信夫 小柳　知彦 関口　恭毅	曾野　和明
東　北		青木　茂之 仁科　雄一郎		高橋　剛夫 佐々木　肇	佐々木　公明
東　京	（最高顧問） 大河原　良雄 渡邊　宏	（理事長） 潮田　資勝 （副理事長） 文野　千年男 賀来　景英 原田　敬美 金田　新 飯野　正子 石原　直紀 藤田　幸雄	舟橋　定之	太田　隆次 早川　与志子 長坂　健二郎 和田　昭穂 佐藤ギン子 福田　学	（審査委員長） 五十嵐　武士 印南　一路
中　部		木下　宗七		千田　純一 星野　靖雄	藤本　博
北　陸		藤原　哲也		森田　幸夫	橋爪　祐美
京　滋	（最高顧問） 岡本　道雄	川又　良也 細谷　正宏		岩山　太次郎	千葉　哲郎
大　阪		清澤　悟 松田　武 大津留　智恵子		牧野　信夫	山藤　泰
中　国		大津　章			木村　榮一
四　国		太田　英章		戸澤　健次	
九　州		今里　滋 稲垣　良典	吉村　徳重	西田　昭彦 林　弘子 落合　太郎	高橋　勤
沖　縄		比嘉　幹郎 東江　康治		川満　敏 尚　弘子 石川　博三	瀬名波　榮喜

第35回日米交流チャリティー・ゴルフ大会

秋空の下で楽しくゴルフ

田中　榮治
（1965　Western Michigan U.）

ここ数日、偶然にも「5」に縁があることが6つも続きました。

先週15日のMichigan Business ConnectionはFulbrightでWestern Michigan University, Kalamazooに留学してから45年目。早稲田大学卒業後50年振りで先週17日に初参加した校友会は第125回目。18日の日米交流チャリティー・ゴルフが第35回、ゴルフのスコアーは95。

年齢73歳と東コースでの順位28は「5」には無縁でしたが。

日米交流ゴルフは4回目の参加ですが、今年も好天に恵まれ、しかもキヤノン・オープンの後で苦労を強いられた西コースでなく、初めて東コースに回して頂き、生まれて初めてシニアー杭でプレイ、西にはないカートが東にはあり、楽をさせて頂きました。歩行距離もたったの9キロでした。

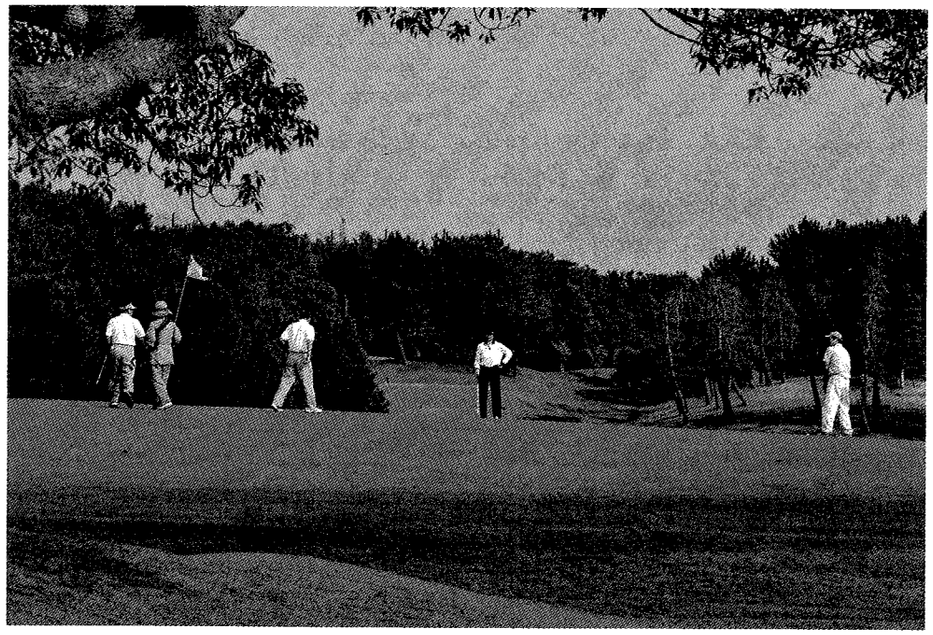
メンバーも硅石鉱山会社を経営されている加藤逸さん、現在フルブライト記念財団副理事長の文野千年男さん（1968 Columbia U.）2人の飛ばし屋。山下宏さん（1960 U. of Wisconsin）は、日米交流チャリティー・ゴルフ大会の優勝経験者で記事と写真がJapan Timesに掲載された方。

偶然ですが、60年フルブライトで留学される会社の先輩を見送りに横浜港へ行った時、同じ船で留学される皇后陛下の兄上（日銀）をご両親が見送りに来ておられるのを目にしました。山下さんは正田さん他2人の留学生と「喫水下の3等船室で一緒で」、偶々同じ船でニューヨーク赴任途中の私の会社の先輩が1等船客に招いてくれご馳走になったそうです。この船には今回ノーベル賞を受賞された根岸英一さんも乗船されていたようです。

楽しくプレイさせて頂きましたが、残念ながらパートナーから優勝者は出ませんでした。初めての女性チャンピオンが難しい西コースから誕生したのは快挙でした。

今年もサターホワイト事務局長がオークションで熱演され、米国からの留学生招聘の為のファンドが積み上がったのは喜ばしい半面、時間切れで優勝者、上位入賞者の喜びの弁を聞けなかったのが残念でした。

来年10月17日の第36回チャリティー・ゴルフ大会が楽しみです。



最高裁判所および国会を見学

ジュリア・ジョーンズ
（日米教育委員会／フルブライト・ジャパン）

2010年6月17日、東京フルブライト・アソシエーションのホスピタリティー委員会は最高裁判所と国会への特別ツアーを主宰してくれました。12人のアメリカン・フルブライター（客員教授、シニア・リサーチャー、大学院リサーチ・フェロー、フルブライト・フェローを含む）が参加しました。

一行を引率してくれたのは舟橋定次（1968年 U of Michigan）、山田真之（1976年 Georgetown U）、福田学（1984年 American U）、島田道子（1957年 U of Minnesota）、大野熙（1956年 Northwestern U）の各氏です。

古田佑紀判事がフルブライターたちを執務室に招き入れ、日本の最高裁とアメリカの当該裁判所との違いについて説明してくれました。古田判事と記念写真を撮ったあと、東京地裁判事で最高裁事務局長を務める大川氏が日本の司法制度についてレクチャーしてくれました。われわれは最高裁の機能についての小冊子をもらい、法律図書館や最高裁大法廷などのツアーをしました。

国会の食堂でランチを食べたあと、グループは衆議院議員で民主党の江端貴子議員にお会いしました。江端議員は1990年にM.I.Tのスローン経営学教室に留学したフルブライターで、ビジネスウーマンから国会議員になるまでの道程を話してくれ、政策などについての質問に答えてくれました。アメリカン・フルブライターたちからの質問は消費税率アップや、正規社員に対する政策、選挙制度の問題などに集中しました。その後、国会議事堂内をツアーして廻りました。

アメリカン・フルブライターたちは日本のフルブライト同窓生たちに会い、日本の政治・司法システムについての理解を深めることができたという貴重な機会が得られて、感謝です。

On June 17, 2010 the Hospitality Committee of the Tokyo Fulbright Association hosted American Fulbrighters with a specially-arranged tour of the Supreme Court and the Diet. Twelve American Fulbrighters, including Lecturers, Senior Researchers, Graduate Research Fellows and Fulbright Fellows, participated in the opportunity. The group was accompanied by Mr. Sadayuki Funabashi (1968 U. of Michigan), Mr. Masayuki Yamada (1976 Georgetown U.), Mr. Manabu Fukuda (1984 American U.), Ms. Michiko Shimada (1957 U. of Minnesota), and Mr. Hiroshi Ohno (1956 Northwestern U.).

Justice Yuki Furuta welcomed the Fulbrighters to his office and sat down with the group to describe some of the differences between the Supreme Court of Japan and its counterpart in the US. Then, after a group photo with Justice Furuta, Mr. Okawa, Judge of the Tokyo District Court and Secretariat Director of the Supreme Court, made a presentation on the Overview of the Japanese Judiciary. Participants also received a booklet explaining the work of the Supreme Court and a tour of the Court building, including the law library and the Courtroom of the Grand Branch of the Supreme Court.

Following lunch in one of the Diet dining rooms, the group met with Democratic Party of Japan (DPJ) Member and Lower House Representative Takako Ebata. A 1990 Fulbrighter from Japan to the Sloan School of Management at MIT, Representative Ebata described her path from businesswoman to Diet Member, and accepted policy and other questions from the American Fulbrighters. Questions from the American Fulbrighters focused on issues such as the raising of the consumption tax, policies toward permanent workers, and the workings of the electoral system. The group also received a tour of the Diet Building.

American Fulbrighters were appreciative of the valuable opportunity both to meet with Japanese Fulbright alumni and to broaden their understanding of the Japanese political and judiciary systems.

Julia Jones

日光・宇都宮ホームステイの旅

山田 真之　ホスピタリティ副委員長
1976 Georgetown U.

毎年の恒例となっている2泊3日の日光・宇都宮ツアーが「海の日」を入れた3連休に開催された。7月17日新幹線宇都宮駅にフルブライト留学生及びその家族が集合。地元のボランティア組織「いっくら会」メンバーの出迎えを受けた。

バスで益子市に直行。江戸時代から240年の歴史と伝統を有する「日下田藍染工房」を訪問。100年以上使われているという甕、紙型等を使った藍染の現場を見学。重要文化財保持者の9代目日下田正氏より、世界の藍染の歴史、藍染の材料となる植物等色々興味ある話も伺うことが出来た。

その後、「益子陶芸美術館」を訪問。横堀副館長の案内で、「益子焼」を有名にした浜田庄司氏（1963 San Jose State U.）の作品等を見学。隣接する「美術館研修室」にて益子焼の制作に挑戦。ろくろ、手ひねり、絵付け等選択して各々思い思いに皿、器、コップ等の制作を体験。ろくろの操作に四苦八苦する姿もあったが、2週間後には自分で作った“益子焼”が登り窯で焼きあげられ送付されてくると聞き、ツアーの良い思い出になると喜んでいた。

バスにて栃木県青年会館「コンセーレ」に到着。ボランティアでホストファミリーを引き受けて戴いた家族の方々の温かい出迎えを受けた。留学生を各々のホストファミリーの方々に紹介し、各々ホームステイ先に出発した。

翌朝、留学生はホストファミリーの方々に連れられてコンセーレに集合。那須烏山市より無料使用の提供を戴いたバスにて烏山に向かった。江戸時代から続く和紙の製造工場を見学。桂離宮、皇居の歌会始め等にても使用されているという本格的な和紙を製造している。この地方には楮（こうぞ）の生産が多く、日本を代表する和紙の生産地であったが、現在は見学した「福田製作所」一軒のみとなっているとの事。オーストラリアより、和紙作りの研修に来ているイングリットさんの経験を交えた説明も聞き、“漉き和紙”を体験。各々独自の“和紙製手作りはがき”を作成した。

昼食では「松月」にて蕎麦打ちの実演を見た。さわやかな手つきを興味深そうに覗き込んでいた。一方、近くの那珂川で取れた天然鮎が焼き上げられた。打ち上げられた蕎麦が直ちに茹でられ、鮎の塩焼きと共に味わった。那須烏山市大谷市長も昼食会に出席され、ご挨拶も戴いた。那須烏山市と姉妹関係にある米国ウィスコンシン州出身のフルブライト留学生もおり、楽しい一時となった。

その後、「山上げ会館」にて間もなく開催される「山上げ祭り」の神輿、祭りのビデオ等を見学。今年は「山上げ祭り」の450周年にあたり、準備等も大々的に行われている。文科省の推薦も既に得て、ユネスコ世界遺産に登録申請することが決まっており、予定通り進めば今年の秋に申請されるとの事。日本の祭りの中で、現在世界遺産に認定されているのは京都祇園祭り等2件のみで、高山祭等2件が申請中。それらに続き申請される予定との事であった。

引き続き、地元の酒蔵「島崎酒造」を訪問。戦時中戦車製造の為掘られた巨大な地下洞窟工場跡を利用し、数万本の酒が貯蔵・熟成され、数十年間寝かされた本格的な古酒も多くあるとの事。見学後、大いに利き酒を楽しんだ。

翌朝、送って来て戴いたホストファミリーの方々とのお別れの後、日光国立公園を訪問。いろは坂、中禅寺湖、龍頭の滝、戦場が原、華厳の滝等豊かな自然を満喫。華厳の滝は、最近の大雨の結果水量がすこぶる多くなっており実に素晴らしい眺めであった。

昼食にはお好み焼きを楽しみ、ツアーの最後のユネスコ世界遺産輪王寺・東照宮を見学。見学中一時的な夕立ちには遭ったが、今回のツアーは全体的に天候にも恵まれ、留学生たちも有意義な経験が出来たと大いに喜んでいた。関係者の皆様に改めてお礼申し上げたい。

秋の鎌倉を歩く会

外池 滋生
1990 M. I. T.

勤労感謝の日恒例の鎌倉ツアー、前日の雨は夜の間中降ったが、朝方からは予報通りほぼ止み、小糠雨になっていたので、ひとまず胸を撫で下ろした。今回は参加者の出だしがよくなかったのであるが、最終的にはTFA関係者16人とゲスト6名の計22名の参加申し込みがあった。それに、加えて当日大野事務局長のお嬢さん（長崎朝子さん）も参加くださり、総勢23名になった。

今回TFA関係では佐藤友美さんと柳田有紀さんという2人の若い女性が参加してくださったこともこの行事としては特筆すべきことであった。お二人は2009年のFLTAプログラム（Foreign Language Teaching Assistant Program）で帰国ほやほやの参加者でした。

北鎌倉に無事集合したあと、円覚寺、明月院、建長寺、鶴岡八幡宮と定番の名所を見て歩いた。円覚寺の階段の周りにはちょうど紅葉がほどよく色づいていて、秋の散策に彩りを添えてくれた。

今回は特にグループとして一団で移動することにこだわらず、4つの名所を見て回って、適当に小さなグループを作って、それぞれのペースで見て回り、しんがりに宮原さんがついて、脱落者がでないように気を配ってくださった。

北条時宗創建の円覚寺（えんがくじ）では、妙香池（みょうこうち）の虎頭岩に虎の頭を探しながら、舎利殿、仏日庵開祖廟などを見て回った。

続いて鎌倉の紫陽花寺としても知られる明月院へ。拝観料を払う入り口の左側の小川にかかる小さな橋の欄干に石のウサギがちょこんと前足をかけているのに今年初めて気づいた。来年の干支かなと思ったが、そうではなくて、どうやら明月にうさぎということのようである。

さらに北条時頼建立の鎌倉五山第一の建長寺へ。立派な山門を通って、760年の年を重ねた柏槙（びゃくしん）を眺めながら、パキスタン共和国より贈られた釈迦苦行像が展示されている本堂、日本最古の禅庭園を巡った。

鶴岡八幡宮では、本殿の参拝の後、倒れて隣に移植された銀杏と、元の木の根元から無数の彦生えの対比に感心し、結婚式を横目にみて八幡宮を後にした。数名の参加者は大仏を見るためにここでお別れ。

三々五々、小町通りを歩いて和民に5時に集合、大野さんの挨拶と乾杯で始まって、2時間いつもの和やかなパーティ。最後にゲストに自己紹介をしてもらうことになり、Farrisさんは日本の茶の歴史を平安時代に遡って研究していること、Phillipsさんは日本の里山のありかたを西洋の農業に生かす道を研究されていること、そしてGoddardさんは1920年代の日本の都市が日本、韓国、中国でどのように捉えられていたかを比較する研究をしているとの自己紹介があった。（筆者も酩酊ゆえ、間違いの段は平にご容赦を。）こうして楽しく2時間を過ごした後、次回の再会を約束して帰途についた。

次回の参加者の呼び水となるよう、今回の参加者の氏名などを以下に列挙しておく。お知り合いの名前をご覧になったかたは是非次回ご参加を。（敬称略、順不同）文野千年男（1968 Columbia U.）、濱田利郎（1969 Columbia U.）、堀江昭（1952 U. of Colorado）、嘉戸正（1968 U. of Texas, Austin）、兼松重任（1958 Harvard U.）、宮原英夫（1964 M.I.T.）、中内恒夫（1959 Harvard U.）、大野熙（1956 Northwestern U.）、岡政昭（1952 Yale U.）、岡本秩典（1965 The New England Conservatory of Music）、佐久間徹（1955 Baylor College of Medicine）、佐藤友美（2009 FLTA Program）、外池滋生（1990, M.I.T. 同伴者外池一子）、山田真之（1976 Georgetown U.）、柳田有紀（2009 FLTA Program）。

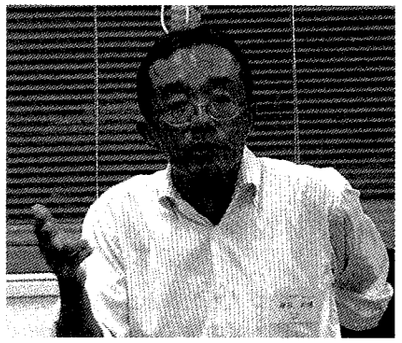
ゲストの名前も記録の掲載しておく。（敬称略）Timothy Unverzagt Goddard (Tug) UCLA, William W. Farris (Wayne) University of Hawaii at Manoa, Carol M. Brewer (Wayne's wife), Adel D. Phillips MIT, Colton F. Heward-Mills Princeton U, David H. Christie (Colton's friend).

次回のために覚えておきたいこと：ゲストのdietary restrictionを確認すること。また、鎌倉在住の濱田さん、堀江さん、宮原さん、中内さんには、定番の名所に追加すべき新しいスポットを盛り込んで、毎年参加のTFA関係者にも目新しいものをふくむコースを毎年提案していただくようお願いした。次回よりよろしくお願いします。

セミナー（勉強会）報告

第20回セミナー　2010年7月2日

日本の公教育・私の挑戦



一九五五年生まれ。東京大学卒、リクルートに入社。二〇〇三年から五年間、東京都初の民間校長として杉並区立和田中学校に。今も教育改革に取り組む

藤原 和博氏
（前・杉並区立和田中学校校長）

私の顔を見て、なつかしいと思われた方もおられるでしょう。誰に似てますか？　はい、そうです、さだまさし。27歳のとき、リクルートの広報課長をしてまして、たまたまホテルでさだまさしが隣に坐ると、彼の目が点になって、「なんで？」という感じ。「今から父親に話しに行こうじゃないか」と拉致されて、さだまさしの事務所に行きました。それ以来、家族同様の付き合いです。

7年前、2003年に東京都で初の公立中学校の民間校長になりました。赴任直前に広島で民間校長が自殺した事件がありました。

はじめに、なぜ私が校長に挑んだかについてお話しします。私はリクルートに18年間勤めて、フェローというのになりました。一度退職して、会社と対等契約を結び、事業主としてリクルートと仕事をするというものです。それが6年間。アルバイト時代を入れると合計25年間、リクルートで仕事をしました。その間にいろいろ考えました。

日本全国に公立の小中学校が3万校あり、いろいろ問題を抱えてますが、一番の元凶は「正解主義」なんです。「一つだけの正解」を求める。『走れメロス』の文章を読んで答える設問で、議論することは許さない。オカミ（著者か出題者）から下りてくる解答が正解で、「正解を覚えなさい」と言う。いまや発展途上国でしかやっていない教育です。欧米の国語ではディベートによってクリティカル・シンキング（批評性のある思考）を鍛えます。正解なんかない時代に「正解主義」の教育をやっていては、情報を選んで自分で考える「編集力」が鍛えられない。この「編集力」が大事なんです。

私は37歳のとき、ロンドン、パリに2年半駐在しました。4歳の長男を現地の普通の学校に入れました。そのときカミさんが臨月で、次男を産んだんですが、自宅で医者の手を借りずに分娩しました。

2年後に生まれた長女は助産婦が「まだまだ」と言ってるうちに、分娩が始まって、私が指で引っ張り出しました。だから、長女が最初に見た人類は父親だったんです。

帰国したとき、長男は6歳でした。いまはもう大学生ですが。私はヨーロッパで成熟社会を見ました。日本もいずれ成熟社会になる。それを見極めたい。社会システムのうち、教育、介護医療、住宅――これが成熟しなければダメなんです。リクルートで40歳以降はこの三つのテーマしかないと考えて、フェローになりました。で、そのうちの教育問題をやったわけです。

成長社会と成熟社会で教育はどう違うか。成長社会では「みんな一緒」が教育のキーワードですが、成熟社会では「それぞれ個性があってばらばら」がよしとされる。自分の世界観、幸福感がある。だから成熟社会では教育も質的に変えなければなりません。「正解主義」ではなく、「情報の編集力」を鍛えて、「納得解」を得る教育が必要です。その変換が日本ではまだなされてない。

中学3年の「公民」の教科書というのは、メチャつまらないです。とてつもなくつまらない。中3でこんな教科書で社会経験のない教師につまらなそうに教えられたら、みんな嫌いになりますよ。「世の中」に関わるということがないままに高校へ行く。高校の教科書も同じようだから「世の中ってつまらない」と思ってしまう。これは為政者にとっては好都合なのかもしれませんが。会社でただ一生懸命に働く人をつくるわけですから。

で、宮台真司と共著で『よのなかのルール』という人生の教科書（ちくま文庫）を書いたら、十万部以上売れました。世の中のことを面白く学ぶための本で、杉並区立和田中学校でやっている「よのなか科」のネタ本です。東京には公立中学が650校ありますが、「よのなか科」をやっているのは和田中だけです。大阪は人権教育が盛んで、僕が行って1年で250校が「よのなか科」「こころざし学」にチャレンジしてます。大阪人はおカミは関係なく、いいとなるとサッとやります。

僕はリクルートのフェローとしてテレビやラジオにも出て、すでに教育評論家として充分に有名でした。そのままやってる手もあったんですが、僕は評論が嫌いで、実践をやりたい。あるとき、杉並区で教育政策の発表会がありました。たとえば大学生に小中高でコーディネーターやサポーターをやらせようとかいうことです。僕は後ろのほうにいたんですが、聞いている校長たちは小声で、「教育委員会が勝手にやっていることだから、すぐ消えるさ」とか言っているわけです。校長が「やろう」としなければ、何も進まないと思いました。校長には人事権も予算編成権もないんです。ただ、「教育課程の編成権」は3万人の校長が持っている。指導要領ガイドラインは文部科学省が作りますが、それを守らなくても罰則はない。現場の校長が決め、教育委員会が追認するだけです。

いま和田中では英数国のコマ数が3年間で他校と比べて400コマも多い。それで杉並区のトップレベルになってます。校長がやらなければ、「オレんとこはいいわ」と言っていては、何も生まれないんです。「夜スペ」（塾の教師による課外授業）について、左翼のおばちゃんたちに差し止め請求の裁判を起こされました。今年3月に勝訴しましたが。「夜スペ」はとくに就学援助所帯などには非常にいい結果をもたらしてます。でも、他校の教頭たちが、「うちでもやりましょうよ」と言っても校長が、「オレの任期中はやめてくれ」と言う。制度や教育委員会がいくらよくなっても、校長を変えないと話にならないんです。

私が和田中でバンバンやって、その成果を公開してマスコミに知らせればいいだろうと、「よのなか科」を5年間やりました。5000人の見学者が来ましたが、22校ある杉並区の校長はたった2校しか来ませんでした。PTAを改組して、父兄だけではない地域全体の人たちが学校と生徒を支援する「地域本部」を作りました。これは公立校を活性化させるには非常にいいプランです。和田中の成功を見て、文部科学省は全国に地域本部を作ろうと、50億円の予算をつけました。土曜日の補習や図書館のマネジメントを地域の人たちが協力してやるわけです。全国3000ヵ所にできましたが、杉並区の校長は誰一人見学に来ませんでした。これはスゴイことですよ。

和田中で改革して、世に知らせる――点の改革から「面の改革」へと進めていきました。大阪市と府下の学校、さらに京都市でも小中校のコミュニティー・スクール化が進んでいます。僕は大阪に（府知事の特別顧問として）入って、現場を廻りました。全国学力調査で大阪はドベ（最下位）に近かった。で、成績上位の子を引っ張り上げることを遠慮せず、「ドテラ」（土曜寺子屋）や「放課後学び舎」で下の子を支えるという和田中の作戦を真似してもらったところ、陰山先生や小河先生の算数キャンペーンも功を奏して半年でドベから（小学校の算数では）平均より上位に上がりました。大阪では成績上位の子を引っ張り上げるということはタブーだったんですが、そのタブーがはずれた。3年生の成績上位者は英検3級か準2級をとっちゃった。そういうできる子とできない子を教室で並ばせるんです。できる子は教えたくてしょうがない。できる子を「ミニ先生」にする。だから、大阪では上の子を引っ張り上げることがタブーではなくなった。それまでは成績に関係なく「オール5」をつけていたような、トンデモナイ学校もありました。そんなのは犯罪ですよね。

点の改革から面の改革に行き、次は国の改革へと進めようとしています。文科省の中に味方を作ると同時に、中教審の中にも、年度内に教育資質の向上を策定する動きがあります。これからだいぶ変わっていくだろうと思います。

日本では1＋2＝3以外に正解がないという「正解主義」の教育をしてきたために、情報処理能力の高いホワイトカラー、ブルーカラーが育って、世界にキャッチアップできました。これからは世界観、ビジョンを自分で編集できなければならない。ジグソーパズルが得意な子だけではなく、「世界観（絵柄）そのものを自分で決定できる」ことが必要です。いまの子は「処理」はできるけれど、「編集」と「創造」が不得意。文科省の役人も、「スエーデン型の教育を」と言われれば作れるけれど、どこのものでもない、日本独自の教育システムを、と言うとできない。

独自の世界観が出せれば民主党も長期政権になりうるでしょう。「情報の編集力」です。赤ちゃんポストをどう考えるか？　もしあれがすばらしいと考えるのなら、自分のところにも作るべきです。子捨てや命の軽視につながると考えるのか？　ここでディベートしたいくらいです。簡単には正解は出せない。OECDの調査でそういう問題が出ても、日本の子は4割が「無答」なんです。正解のない問題には答えられない。私は「正解主義」ではなく「修正主義」がいいと思っています。ありもしない正解を求めて100回会議したってダメ。実践してよくなければ100回修正したらいいんです。皆さんの孫でも、

就職でABC……どこか一社に「正解」があると思って入ると、すぐ「ちがう」となって、辞めてしまう。結婚もそうです。これからの人生は修正主義で生きなければならない。

いま全国に公立学校の校長は小学校2万人、中学校1万人います。小学校は免許を持って長い経験のある人のほうがいい。担任の先生が休んだら、校長が教えなくてはダメです。が、中学の校長に免許はいりません。いまの中学校長1万人のうち、7割は早く辞めてほしい。今後10年間、統廃合で減りますが、3000人を民間からリクルートしたい。

さらに、地域の小学校2校、中学校1校をまとめて学園化して、CEOは年齢制限なし、学園全体をまとめ、校長はCOOをやる。CEOは村長みたいに学園外との連携に携わる。そうなれば教育問題に関心のある人は民間校長になる手もあれば、学園長CEOになる手もあるわけです。『坂の上の雲』に出てくる秋山好古は陸軍大臣のあと、元帥になって天皇の輔弼をしてほしいと頼まれるんですが、断って故郷の愛媛北高校の校長になりました。死ぬ前に自分の人生を故郷の教育につなげる仕事をする。いまの人たちにはその気概がない。

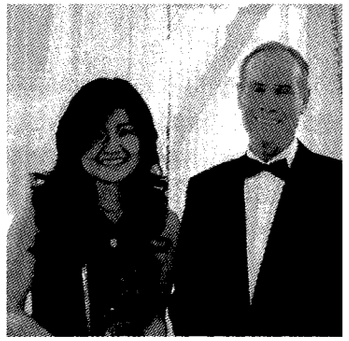
私の後任の和田中校長も改革でいろいろイジメられてますが、とにかく目の前の子に「分からないことを分からせる、できないことができるようにさせる」――その一点にすべての手段を結集している。守るべきものは守る。とにかく子供たちのためにやっているんだということを分かってもらえば理解されるんです。私は校長時代、モンスター・ペアレントや地域社会とのトラブルは全部オレのところに回せ、と言ってきた。先生もそれで信用してくれました。われわれがやってきたことは「よのなかnet」(http//www.yononaka.net) でビデオも含めて、すべて見られます。ぜひ見てください。『つなげる力』(9月から文春文庫)、『35歳の教科書』(幻冬社) などの本も読んでください。

第21回セミナー　2010年9月3日

NYの日本人女性のChoiceを映画に

我謝 京子
(1991 U. of Michigan)

「2001年に娘とニューヨークにやってきて半年も経たない9月11日にテロに被災した。そこで日本人女性たちに大いに助けられた。日本では男女雇用均等法1期生の女性記者で、子どもがいる記者も当時はほとんどおらず、ずっと孤立感があった。被災したNYではむしろ連帯感を感じ、この気持ちをいつかは映画にと思っていた」と我謝さんは話し始めた。



ロイター記者。上智大学卒業後、テレビ東京報道記者、ミシガン大学留学を経て、2001年よりロイター記者。09年の自主映画「Mothers' Way, Daughters' Choice」が「フロントページ賞」受賞。左の写真は授賞式会場でのスナップ。我謝さん提供。

「きっかけは、ロイターの同僚フランチェスカ・セグレが書いた "Girl Meets Goy" という本。ユダヤ人である彼女が台湾系の男性をパートナーとしたことからくる罪悪感を描いていた。そこで編集者に『この本の日本人女性版をつくったら、おもしろいと思います』と話しかけると、即答で『だめだめ、すべて白紙よ』と言われた。21世紀のニューヨークでも日本女性は自己主張しない、白紙のイメージなのだ。『その誤解を解いてみようじゃないか！』

こだわったのは『自らの選択で』ニューヨークにやってきた日本人女性を取り上げること。そしてその選択の結果をも自ら受け止めて頑張っている人に絞った。そういう強さのようなものを出したかった。

撮影では、日本語と英語で別々のアングルからインタビューを撮った。言語によって声のトーンや表情が変わるからだ。興味深かったのは、表情だけでなく、答えも変わったこと。日本語では『母は完璧な専業主婦で、わたしにはそれはできない』。しかし英語では、"I love my mother, but I just don't want to be like her." 一つの身体に日本と米国の二つの文化が存在していることを感じた。

ようやく完成した映画『Mothers' Way, Daughters' Choice、母の道、娘の選択』は、世界各地の映画祭で上映。性別・国籍にかかわらず共感してもらえた。それは自分の中の二つの文化というところで響くものがあったからだと思う。あるアメリカ人の実業家はそれを『心の中で二つのテープレコーダーが回っている』と表現していた。

映画は、母への反発と愛情と自分の選択を描いているが、タイトルではアポストロフィーをあえてMothersの複数形s のうしろにつけた。映画に登場するたくさんのお母さん像、この映画をみる観客のお母さん、そして母国日本への思いをも含めたかったからだ。そしてDaughtersも複数形とした。これは私たち『娘』の世代だけでなく、私たちのその次の『娘』たち世代をも含めたかったからだ」

セミナー会場は非会員も含め女性が9割。子どもを持つことで学べること、機会を失うこと、自由にconnectしているつもりで実は選択はせまくなっていないか、など自問を含めた質疑が続いた。このセミナーから1ヶ月後うれしい知らせが届いた。ニューヨークの女性記者団体が優れた報道を表彰する「フロントページ賞」の「ドキュメンタリ賞」を授賞、東京新聞に掲載された写真の中でダン・ラザー氏と並ぶ我謝さんの笑顔がまぶしい。

第22回セミナー　2010年11月19日

「戦争」を書くこと

一九六一年、熊本県生まれ。北海道大学文学部卒業。二〇〇六年、『散るぞ悲しき硫黄島総指揮官・栗林忠道』(新潮社)で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。

梯(かけはし)　久美子氏
(作家・大宅壮一ノンフィクション賞受賞)

私は1984年に北海道大学を卒業して、編集者を目指し、友人と編集プロダクションを作ってライターと編集の仕事を続けていました。来年40歳というとき考えました。このまま60になって編プロの社長業をやってるのもちょっと寂しい。で、フリーとして文筆業に専念したんです。幸い「AERA」の「現代の肖像」などをやらせてもらえるようになりました。

あるとき作家の丸山健二さんをインタビューしたら、なぜか気に入られて、長野のお宅に度々伺うようになりました。その丸山さんに、「硫黄島の栗林を知っているか？」と尋ねられたんです。私は戦争ものなんか本も読まず映画も見ませんから知りません。でも丸山さんに、「日本の軍人には珍しく合理的で家庭を大事にした人。梯さんのような人が書いたら面白い」と言われたので、アマゾンで検索して3冊買って読みました。その中に『玉砕総指揮官の絵手紙』がありました。アメリカ駐在中、息子に宛てた絵手紙ですが、末尾に硫黄島から奥さんに宛てた遺書のような手紙もありました。それが、「お勝手の隙間を直してこなかったのが心残りだ」とか、ずいぶん所帯じみた内容で、だからこそ気になったんです。いろいろあって息子さんにお会いしたら、きちんとファイルされた手紙41通を見ることができました。それが本格的に取材を始めるきっかけでした。ただ、私のような戦争を知らない者が2万1千人の日本兵が死んだ島のことを書いてもいいんだろうかという迷いはありました。

取材中に栗林中将にかわいがられた貞岡さんという元軍属の方に高知でお会いしたんです。「私は閣下と一緒に死にたかった」と言われるような方なんですが、取材の最後に栗林中将が大本営に送った訣別電報の話になった時、その電文を暗唱なさったんです。「私にとってはお経のようなものです」というその電文をテープにとりました。

帰京して戦時中の新聞を見ると、その電文が出ていましたが、貞岡さんが暗唱されたものと異なる部分がある。とくに辞世の歌の末尾の「散るぞ悲しき」というのが、「散るぞ口惜し」になっていた。大本営が勝手に改竄したんです。それを見た時、やはりこれは書くべきだと思いました。栗林中将はアメリカで最も尊敬された日本人将軍です。それは米軍に最大の犠牲を強いた将軍だから。バンザイ突撃をせず、合理的戦術と徹底したゲリラ戦で、上陸後36日間も持ちこたえたことを米軍の戦史も讃えています。

この本が大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれ、それから戦争関係の仕事も増えて何冊か本を出しましたが、女性はいつも脇役でした。でも、戦争の頃、若い女の人たちの青春時代はどうだったんだろうと考え、書いたのが『昭和二十年夏　女たちの戦争』です。その中に書きましたが、被爆死した女性たちが着ていた服を撮った石内都さんという写真家がいます。その『ひろしま』という写真集を見ると、「原爆で死んだ人の遺品をこんなに綺麗に撮っていいのかな」と思うほど美しい。そのうち石内さんの撮影に同行させてもらうようになりましたが、死んだ娘たちはもんぺの下に花柄のブラウスなんかを着ていたんですね。ぼろ布のようになったピンクのブラウスがあって、広げてみると赤い薔薇型の飾りボタンがついていたんです。それまで重苦しい気持ちで見ていた女性たちが、その瞬間、みんなホッとして喋り始めました。今の自分たちに繋がったんですね。

戦争や死者のことを書く後ろめたさはあるけれど、何かの形で現在に繋がっていくということもあるかもしれない。迷いつつ、私は何かを書き続けていこうと思っています。

「同窓生の掲示板＆短信」特集

アメリカの変化

三浦　昭
（1950 U. of Rochester）

私が初めてアメリカに来たのは、1950年の夏、ガリオア留学生としてであった。その頃は、まだフルブライト留学生というものはなく、日本とドイツという第二次大戦の敗戦国を対象として米国が始めたものが、このガリオアというプログラムだったのだ。ガリオアは、GARIOA、つまりGovernment Aid for Relief in Occupied Areasというもので、1949年に始められた時には、少数の教育関係者のみが選ばれ、一般に開かれたのは次の年だった。大学卒業生で35歳以下の者が、その試験を受けることを許され、全国から数千人の者が受験したと思う。その頃の女性は、大学卒が少なかったので、専門学校卒業の女性も受験を許されたのである。私は幸いにも、三百人足らずの合格者の一人として選ばれ、一年間の留学が可能となった。

1950年の7月に渡米した私にとって、アメリカ留学は忘れ難い経験であった。一年間の留学後、1951年の夏に帰国して、日本で教育に励んでいたが、1957年にアメリカ人と日本で結婚し、彼女の希望で1960年からアメリカへ移り、以後現在までアメリカに居住している。つまりアメリカ滞在がすでに50年になり、アメリカのいろいろな変わり方を見てきたわけである。83歳になってしまった私は、歳のせいで、昔がなつかしくなり、社会の諸変化に悲しさを感じることが多いので、それについて書いてみたい。

先ず気がつくのは、言葉の変化である。日本語も同様だが、英語も時と共に変わりつつある。例えば、人に会った時に、“Hello!”と言う人は非常に少なくなり、“Hi!”が普通になった。そして、普通の会話で“Yes!”の代わりに“Yah!”と言う人が実に多い。

昔は、「あなたたち」「君たち」の意味で“You folks”と言ったものだが、今は“You guys”が普通になってしまった。単数形のguyは「男」の意味なのに、複数形なら、相手が男と女でも、女だけでも、使われるようになってしまった。私の子どもたちも、私たち両親に、“What are you guys doing today?”などと平気で言うようになった。

そして、“you know”という言葉を差し込むことが、呆れるほど増えてきた。昔も、“you know”の使用がなかったわけではないが、この頃は、やたらにそれが入る。文の終わりに“you know”を入れる人もいるし、もっとひどい場合には、文の始めや文の途中に“you know”を差し込む人もかなりいる。数ヶ月前のことだったと思うが、John F. Kennedyの娘Carolineが、テレビのインタビューを受けた時、やたらに“you know”を使うので、テレビ担当者にも気づかれ、そのことにコメントした人もいた。昔の人は、“you know”をあまり使わず、言葉がうまく出て来ない時には、“uh”とか“um”などと呟いただけだったと思う。

そのほかの大きな変化の一つは、first nameの使用が増えたことであろう。私が1950年に男子大学に留学した時、どのクラスでも先生が学生の苗字にMr.をつけて呼んでくれた。高校ではfirst nameなのに、大学に入ると大人扱いをされ始めたと言えるだろう。そして、店の人も、客をfirst nameでは呼ばなかった。私は時々写真屋へフィルムを持って行き、プリントを作ってもらったのだが、必ず“Mr. Miura”と呼ばれたことを思い出す。歯の治療に通った時、歯科医の助手（女性）が、いつも私を“Mr. Miura”と呼んでくれたことも忘れ難い。

そのほか目立つのは、いれずみの増加だ。日本語でも、この頃は「いれずみ」と言うと、古臭く聞こえるからか、「タトゥー」と呼んでいるようだが、アメリカでのタトゥーの流行は、信じられないほどだ。1950年に私が留学した大学で見かけたタトゥー男は、たった一人だけで、彼は海軍から帰ってきたからであろうか、腕に錨の小さなタトゥーを一つ入れていた。現在のアメリカでは、昔と違って、タトゥーだらけの腕が目立つ。そして、腕だけではなく、胸にも腹にも、そしてその他の部分にも、タトゥーをつけている者が多い。そして、それは男性だけではないのだ。プールなどで泳いでいる女性を見れば、それがすぐ分かる。タトゥーは、決して美しいものではないし、老人になって皮膚が老化すると、ひどい状態になると思うが、タトゥーの男性も女性も、そんなことは考えないらしい。

もう一つの変化は、ひげが増えたことである。勿論、ずっと昔のアメリカでは、ヒゲ男が多かった。例えば、リンカーン大統領の顔は、ひげで覆われていた。しかし、1950年に私が初めて渡米した頃のアメリカには、ヒゲ男がほとんど皆無だったのである。私が留学した大学でも、ヒゲを生やした先生は、いなかったように思う。学生の間にも、ヒゲ男はほとんどいなかった。たまにはいたが、せいぜい口ひげ程度だった。ほかの男子学生たちは、いつもきれいに顔を剃っていた。この頃の男性は、かなり変わってしまい、無精髭をはやしたまま歩いている学生も少なくない。テレビで見かけるバスケットボールやアメフットのプロ選手の顔も、私には「見苦しい」と言いたくなるほどだ。ひげだけではなく、髪の毛も同様である。若者たちが理髪店へ行く頻度は、かなり減少しているようである。

私のように歳を取ってくると、とても気になることがもう一つある。それは、この頃のスポーツ選手の表情がひどいということだ。私はテニスが好きなので、最近体調を崩すまで、自分でもやっていたし、今でもテレビで試合を見るようにしている。昔のテニスは、紳士淑女のスポーツだった。試合中の態度も、見ていて気持ちのよいものだったのに、この頃の選手はひどい。特に女性のプロたちは、ボールを打つ度に、ひどい声で叫ぶのだ。私はテレビで見ていても、それがあまりにも聞きづらいので、音を消して見るより仕方がない状態になってしまった。女性のプロの一人が、そのことを批判された時、「私は別に悪いことをしているとは思わない」などど、平気で答えたのだから、呆れてしまう。

私はバスケットボールが好きで、中学高校時代に、戦争でやめざるを得なくなるまでやったものだ。アメリカへ来てからも、バスケットの試合へ行ったり、テレビで見たりするのだが、選手たちがかなり乱暴になってきてしまい、昔なら反則だったプレーでも、この頃は審判の笛が吹かれないことが多い。Los Angeles Lakersで活躍したKareem Abdul Jabbarなどは、紳士的な選手だったが、この頃は彼のような選手が見られないと言えるだろう。

次に、社会的な変化について語ってみよう。一つは、犯罪の増加である。日本でも犯罪率が高まって来ているが、アメリカではもっとひどいようだ。私の住んでいる地方では、この頃の新聞やテレビの第一トピックが犯罪ニュースであることが多い。しかも、それが、殺人や強盗や強姦のニュースなのだから、私は憂鬱にならざるを得ない。

すべての値段が上がったのは、日本も同様だが、私が初めて渡米した1950年には、何でも安かった。ニューヨーク市の地下鉄は、たったの10セントの料金を払えば、どこまでも行けたのである。今は、2ドル以上になってしまったが、東京の地下鉄料金と比べれば、高いとは言えないかもしれない。郵便は、葉書が1セント、封書が3セント、日本への航空便は、air letterなら10セントで済んだが、現在では98セントになっている。E-mailが流行している現在は、郵便で手紙を送る人が極端に減少したが、それは日本も同様であろう。

ひどい変化についてばかり書いてしまったので、最後に、もっと明るい事柄について書いてみたい。先ず一つは、日本車の増加である。日本車は、1960年代までこちらでは見られなかった。その頃、家内（アメリカ人）の従兄が自動車の商売をしていて、ダットサン（この名前は、もう使われていないようだが）を手に入れたので、家内の両親がそれを一台買ったのだ。ある時、我々夫婦はそれを借りて、小旅行をしたのだが、しばらく行くと、shifterが折れてしまった。幸い、近くにガソリンスタンドがあり、そこで何とか直してもらえたので助かった。それ以来、アメリカでは日本車がどんどん増え、どこへ行っても日本車の姿が見える。今はトヨタ車がアメリカで大問題になっているが、ひどい結果にはならないだろう。

最後に言いたいのは、タバコを吸う人が減ってきたということである。日本でも喫煙者がある程度減少しているようだが、アメリカの方が変化がずっと目立つ。癌を防ぐために、禁煙を増やそうとする傾向が強まってきているのだ。私の住んでいるウィスコンシン州の州都マディソン市では、去年から、レストランやバーがすべて禁煙となり、今年の7月からは、州全体にそれを広げることが決定した。私が教えていたウィスコンシン大学では、すべての建物が、十年以上前から禁煙となったので、私のようにタバコを吸わない人間には、大変教えやすい環境になったのである。

社会が悪くなるばかりではなく、よくなる点もあれば、生きている我々には有難い。

二冊目の著書

竝木 崇康
（1982 U. of Massachusetts）

先日はNewsletter No. 22をお送りくださり、どうも有難うございました。カロライン・又野・ヤンさ

んの叙勲のことは新聞で報道されたときにお名前を拝見して大変喜びましたが、今回のNewsletterで、お元気そうでかつ若々しいお写真を拝見して、とても嬉しく思いました。私は1982-83年の留学（U. of Massachusetts, Amherst 言語学）でしたが、そのときの出発前の集まりでヤンさんのお話を聞き、ゆとりがありユーモアのわかるヤンさんのお話がとても素敵でした。また今回のアンケート「若手フルブライター体験者は何を考えているか？」は時宜を得た記事でした。私はゴルフが好きではないので、チャリティゴルフ大会には興味がありません。むしろバーベキューやガーデンパーティの方がいいという若手の提言に共感を覚えます。また他にも傾聴すべき意見や提言がありました（たとえばクレジットカードでの年会費の支払いなど）。

話は変わりますが、10月に2冊目の著書を上梓する機会に恵まれました。今回は専門性を抑えて一般読者向けに書いたものです。「コーヒーブレイク」という名前でコラム（本文の「である調」とは違う「ですます調」で書いてあります）も8編入れ、欧米で人前でくしゃみをしたときのやりとり、Mickey Mouseのファーストネームはなぜ Mickeyか？、アメリカの自動車のナンバープレートの特徴は？（カラー写真付き）、日本の運転免許証とアメリカのそれとの共通点と相違点、Star Warsにおける登場人物の英語とDarth Vaderの最期、などのアメリカ絡みの内容も入れました。

記念に1部寄贈させていただきますので（遅ればせのクリスマスプレゼントになりましたが）、お受け取りいただければ嬉しく存じます。私が留学したときには特に岩田さんや上村さんにお世話になりました。上村さんは残念なことに他界されましたが、岩田さんはお元気でいらっしゃいますか？　どうぞ宜しくお伝え下さい。

アメリカで感動したこと

鈴木 明子
（1960 Columbia U.）

アメリカで感動したことは数え切れない程もある。その中で特筆すべきことは「努力した量と質を認め、学生の国籍は問わない」ことである。1960年から1年の予定が新しい1つの資格を得、臨床を積むために3年間滞在させて頂いた。授業料から全てを学科長がarrangeし、帰国後もエールを送り、亡くなるその月まで“I 'm very proud of you”と手紙をくれた。私が1966年に日本の背番号1であったのが、09年には47,759名になった。職種は「作業療法士O.T.」で、大学はColumbia大学医学部、学科長はProf. Franciscusである。「個人を大切にすること」を徹底的にアメリカで学んだ。

著書2冊

松下 薫一
（1962 Johns Hopkins U.）

文芸社より著書2冊を出版。「成功への方程式」――解は「失敗しない事」と題し、成功とは持続的に社会にプラスの貢献を行う事。指導者の判断ミスで没落する等、失敗の根源排除策を解説。他は「合州国日本」多様化への道（「脱・中央集権官僚国家」と「廃県置州」）と題す。江戸時代は小さな中央政府の幕府と、自治権付与で多様な自助努力の藩主を中心の地域主権社会。多様化の推進に量子力学的発想で、EU的主体性を備えた十州分割を提案。

国際的文化事業に人材を

佐原 亜子
（1985 U. of Maryland）

現在私はNPO法人日本文学出版交流センターという組織の事務局長を務めております。当センターは日本文学を海外に紹介することを目的に設立された非営利団体で、現代日本文学を海外で翻訳出版する事業を行っています。http://www.j-lit.or.jp/

今、当センターの趣旨をご理解くださって文学に関する国際的文化事業をご一緒に担っていただける人材を求めています。そこで、フルブライト同窓会を通じて、どなたかご紹介いただけないかと思い、ご相談する次第です。

ご多忙とは存じますが、アドバイスいただけましたら幸いでございます。よろしければ直接伺ってご説明さしあげたく存じます。
（メールアドレス　j-lit@j-lit.or.jp）

定年退職後

浅野 侑三
（1969 Columbia U.）

筑波大学を定年退職後、島根県松江市で翻訳をしたり、高校生に物理、数学、英語などを教えたり、地元のオーケストラでヴィオラを弾いたりして忙しく、楽しく暮らしております。

2冊の著作集

星野　命
（1955 Iowa State U.）

「人間性・人格の心理学」
第1部　人間性の心理学（人間性、人間尊重者、人道実践家について考える：現代社会における人間性の三次元、特に悪の（非人道的・背徳的）次元について。人間性に内在し存続する「悪」の存在について――大学生と社会人の意識）
第2部　人間学的視点とアプローチ（欲望の心理―人間学的アプローチから：人間の欲望に見る動物性と霊性：意欲――その人格形成における意義）
第3部　人格の心理学（人格の概念：性格の独自性と共通性の総合としての個性：教育と人格理論：おのが個性の伸長と生きがい：人格の成熟）
第4部　人格の諸側面（感情の心理と教育：豊かな感情――その人格心理学的考察：家庭における感動の教育：優越感の心理・劣等感の心理：モラル考察の最近の動向と現在）
第5部　自我・自己の心理（自我：自己の成長・発展と転機：わが国における「自己」の心理学研究の私的回顧40年と将来展望：自己意識と言語文化―自称詞の言語社会心理学的考察）

「異文化間教育・異文化間心理学」
第1部　異文化間教育（異文化間教育とコミュニケーション：海外子女教育30年目の役割と課題：異文化間リテラシーと海外子女教育：異文化間教育学会25年の回顧と展望――陽の目を見、市民権を得た学会の道程と旅先：異文化間教育と多文化（共生）教育における教師と教師教育総論）
第2部　異文化間心理学（異文化間心理学――特有現象と普遍法則を探る：異文化理解とは：異文化理解の裏表：青年の異文化体験とナショナル・アイデンティティー自叙伝と手記による考察：青年期の異文化体験と成長――カルチュア・ショックを越えて：異文化の中で養うポジティブな心と自我アイデンティティー：帰国子女の行動特性：言語意識：海外成長日本人の文化的ポテンシャル：イタリア系アメリカ人のコミュニティ形成と民族文化――シカゴ西郊のコミュニティの場合）
第3部　カルチュア・ショック（カルチュア・ショックとは何か：カルチュア（文化）・ショック
帰ってきた私たち――帰国学生の自叙伝から
個人レベルの文科摩擦について
カルチュア・ショックの種類・具体例・対策
カルチュア・ショックと性格）
（いずれも北樹出版）

ソマリア人身売買

上野 真由美
（2009 Harvard U.）

東京フルブライト・アソシエーション（TFA）第21回セミナーのご連絡ありがとうございます。大変残念ですが、現在アフリカ勤務中のため失礼させていただきます。ところで一つご相談ですが、貴機関でニュースレターでもなんでもよろしいのですが、日本政府の英断（TICADの枠組みです）で昨年から実施されている国際社会初のソマリア人身売買対策についてとりあげていただくことは可能でしょうか。ご承知の通りソマリアは1991年から内戦が続き、政府機関は存在せず、アルカイダとの密接なつながりが指摘されているアルシャバブが一部実効支配するなど、「失敗国家」として名をはせているところです。日本政府はTICADの枠組みで2008年からソマリアにODA支援を行っており、トップドナーとして徐々に影響力を増しつつあります。

ソマリア人身売買対策はそのODAをファンディングソースとして2009年7月から当国際機関（IOM－国際移住機関）においてプロジェクトが立ち上がり（私が立ち上げました）、この1年鋭意努力した甲斐あってBBCソマリア、共同通信、IRINなどのメディアに取り上げられました。

私は米国の人身売買対策研究ということでフルブライターに選んでいただき、2009年にハーバード・ケネディースクール修了後、このプロジェクトをまかされています。現在はナイロビ勤務ですが、8月か9月からソマリア勤務予定です。

アッツ島　着陸記

宇野　稔
（1952 North Carolina State U.）

過ぐる第二次世界大戦では日本軍は南方の多くの島々に進駐し、激戦の末全滅あるいは撤退した。し

かし北太平洋のアルーシアン列島にも出兵したことはあまり知られていない。筆者は戦後進駐軍の占領地救済資金GARIOAによるアメリカ留学生として1952年渡米する途中、日本軍が全滅したアッツ島に不時着陸し、激戦地跡を日本人として初めて訪れた。下記はその時の記録である。なお当時は飛行機の航続距離は短く羽田よりカナダまでの途中で着陸、給油を必要とした。今なら無着陸で太平洋を横断するので、このような事は起こらない。

1952年7月25日夜10時30分、Canadian Pacificの4発、36人乗り、空の女王と呼ばれるDC4機にて羽田を出発。始めての空の旅に出る興奮のためか、あるいは絶えず響いてくるエンジンの轟音や振動のためか毛布を引っかぶったが一向に寝つかれない。漸くうとうとしたと思ったら窓外はすでに明るい。時計を見るとまだ3時を少し過ぎたところ。やがて機は雲海に突入、上下左右に激しく揺れ始める。今まで晴れていた周囲も急に暗くなり、「NO SMOKING」「FASTEN SEAT BELT」のサインが出る。機はフラップを開き、脚まで下げてどんどん下降。近付いた海面には三角波の波頭が白く見える。雲の端を一回、二回旋回すること暫し。やがて再び上昇、どんどん後戻りを始めた。どうしたのであろう。しばらくすると前方に白雪をいただき低くはあるが鋭い山々が現れる。海岸は遠浅で赤褐色の溶岩が押し出し、白い水鳥が数羽エンジンの音に驚き逃げて行く。小山を廻ると小さい入江が見え、その向こうの人気のない飛行場に滑るように着陸。格納庫一つ飛行機一つ見当らない。いったいどこへ来たのだろうか？ 聞けば予定地のセミヤは霧のため着陸できず、ここATTU島に不時着したとのこと。ATTU島！そう聞くと今までぼんやり眺めていたあたりの景色も急に非常な意味を持って身に迫ってくる。

やがて駆けつけた現地駐屯のアメリカ海軍の厚意により自動車で兵舎に着き、山盛りのアイスクリームを御馳走になる。夏服には肌寒い北方の小島でアイスクリームを震えながら食べるのも変わった経験である。兵舎の前に飾られた分捕りの一基の日本高射砲のことから昔の戦へと話は移り、出発を待つまでの時間を利用し自動車に分乗して激戦地に向かう。人跡稀なこの小島に四通八達に作られた自動車道路に驚異の目を見張ると共に、住み棄てられ荒れるにまかされた兵舎やバラックの荒涼とした眺めにひとしお哀れを感ぜさせられる。ほぼ30分でEngineer Hillに到着。ここはMassacre Bayを見下ろす台地で、10 feet前進するのに2週間を要したという激戦地。あちこちには今もなお防空壕が点々として残り、その間には「47 JAPANESE」とか「29 JAPANESE」とか書いた粗末な木の十字墓標が鉄条網に囲まれて淋しく立っている。何が為にこの様な北海の小島に幾多の貴い同胞の血を流したのであろうか？　感無くしては見られない光景である。

岡の中腹には山崎大佐の戦死を示す次のような碑が石の上に置かれている。

ATTU ISLAND　WORLD WAR II
YAMASAKI, A COLONEL IN THE JAPANESE ARMY WAS KILLED IN ACTION HERE THIS POINT. COLONEL YAMASAKI COMMANDED JAPANESE TROOPS ON ATTU LOCATION: CLEVY-PASS-ENGINEER HILL CHART. 11431 SEAMS COORHATES: 586137 INV 64658 ERECTED BY ORDER OF THE COMMANDMENT SEVENTEENTH NAVAL DISTRICT AUGUST 1950

振り返る山々は信州の上高地を思わせるようで、澄み切った大気を通して太陽は無心にこの古戦場を照らしている。僅かに咲き乱れた現地特有の紫のValley flowerを手向けて霊を慰め、山を下りて洞窟に向かう。これは二つあり共に日本軍により着手されたが未完成のまま米軍の手に移り、以後その一つが完成されたもので、Engineer Hillを貫通し長さが5哩に及ぶとの事である。高さ、幅とも10米に近く、一時倉庫、通信所などに利用された由であるが、今は壁から、天井からぽたぽた落ちるおびただしい水滴のため50米も入ると膝を没してその奥は不明と言われる。

泥だらけになって兵舎に帰り、熱いコーヒーに体を暖めていると、暮れなずむ北海の空も次第に夕暮に迫り、1、2隻港に浮かぶ戦艇の米国旗もするすると下ろされる。冷気ひとしお肌を刺すようになったが、僅か30哩の彼方に浮かぶセミヤの霧は益々濃さを増すばかり。遂に機長の決心で予定地を省略し、帽子を振って別れを惜しむ兵士達を残し、一気にVancouverに向けて出発。Seattle, San Francisco, Denverを経て無事New Yorkに到着。

ガリオア寸考

比嘉 幹郎
(1950 New Mexico U.)

ガリオア（GARIOA）は、何の頭文字なのか。幾つかの解釈がある。例えば、岩波書店の『広辞苑』第6版には“Government Appropriation for Relief in Occupied Areas”（占領地救済政府資金）となっているが、研究社の『新英和大辞典』第6版では、“Government and Relief in Occupied Areas”とある。後者を訳すると“占領地域の統治と救済”で、前者とは違った意味になる。私は後者が正しいと思うのだが、その他の説も見受けられるので、いつか、米国公文書館で調べてみたい。

近況と新著

湊　晶子
(1956 U. of Oregon)

私は2002年より2010年3月まで東京女子大学学長を2期8年務めました。4月からはワールド・ビジョンの国際理事に選出され、途上国の開発、教育に従事しています。角川書店の勧めで留学時代のエピソードを盛り込んだ『女性を生きる』が3月10日に出版されました。喜寿を過ぎても働けるのは、フルブライトの経験のお陰と感謝しています。

NYのWASEDA USA

加藤 幸男
(1990 IEA Program)

米国東部において主に募金活動を推進する為、早稲田大学がニューヨークに開設した「WASEDA USA」の初代現地代表として1年半ニューヨークにて勤務。2010年1月に帰国いたしました。

ミッドタウンの44丁目の事務所所在地は、由緒ある建物が多く、ハーバード大学卒業生の為のハーバード・クラブ、ニューヨーク・ヨットクラブ、アルゴンキン・クラブ等が軒を連ねる文化・伝統エリア。1920年代に雑誌「ニューヨーカー」の編集部が使用した建物の中の事務所には地の利がありました。帰国後は早大総長室に勤務中です。

ローマ帝国の興亡に学ぶ

依田 直也
(1954 Harvard U.)

「古代ギリシャ文明と古代ローマ文明に育まれたローマ帝国の興亡」について学ぶため、南イタリアとシチリア島の古代ギリシャ遺跡を訪ねた。南イタリア本島のレッジョ・ディ・カラーブリアにわたりターラント、マテーラ、ソレントなど、各地の考古学博物館を見学できた。ナポリ考古学博物館などを見学した。「ローマは、なぜ、崩壊したか」。歴史の転換期における現在の日本のビジョンを把握する必要がある。

そこで、現地イタリアを訪問し、古代ギリシャの考古学遺跡や美術品を学んだ。ポンペイ、ナポリ、ローマの遺跡を見学した。歴史を心に刻み、文明の衝突を解析すること。さらに21世紀の日本の将来を先見性をもって見つめる必要がある。

「良寛さま」

小野 昭一
(1959 U. of Michigan)

小生、今のところ元気です。昨年、郷土が誇る文学者相馬御風が児童向けに著した『良寛さま』を、Ryokan-sama, The Reverend Ryokanとして、友人のPaul Rileyと英訳し、新潟市考古堂から出版しました。

近頃は、無農薬の野菜作り、下手な水彩画、もっと下手なウクレレなどを楽しんでいます。また去年から、近くの小学校2校で英語指導の手伝いをしています。

近況

村川 庸子
(1999 Columbia U.)

2010年3月16日、佐倉市の国立歴史民俗博物館で特集展示「アメリカに渡った人びとと戦争の時代」がオープンしました（2011年4月3日まで）。私の一番若いときの仕事である明治・大正期の愛媛県からの出移民、移住地の一つであるシアトル・タコマでの生活の様子から、数年前に博論にまとめた日米戦争中の日系アメリカ人の強制立退き・収容政策に関わる研究まで、途中でみつけた物資料を集めたものです。ご覧頂けると嬉しいです。

葉山町に引っ越す

兼松 重任
(1958 Harvard U.)

葉山町に3年前に引っ越してから、毎年一回あるアメリカンフルブライターの鎌倉旅行のお手伝いを

やっています。これは約50年まえにUSAで勉強させていただいた恩返しでもあります。日常は野菜づくりと海釣りを楽しみ、旅行は北極圏のトロムソで満天に拡がるオーロラを見て喜び、地中海クルーズやトルコも楽しみました。

妻の死

寺澤 芳男
(1956 U. of Pennsylvania)

妻・久美子（旧姓村田）がすいぞうがんで死亡しました。2009年7月2日。彼女もフルブライターで1983年ダートマス大学のMBAでした。

フルブライト関係の集りにはいつもいっしょに参加し、久美子はフルブライターであることを大変誇りにしていました。

久美子と暮らしたオーストラリア・パースの小さな家にひとりで住んでいます。

ジャズ・ヴォーカルの楽しみ

小島 秀樹
(1977 South Methodist U.)

留学の後、自己の法律事務所をつくり、現在20数名の弁護士と一緒に働いています。8年前からジャズ・ヴォーカルを習い、現在は月に一回位、パーティー等会合でライブを演奏しています。曲目はジャズに限らず、ラテン、ポップス等も歌っています。食事は13年前から玄米菜食のマクロビオティックなので、都内のマクロのレストランでも時々歌っています。いつかフルブライター同窓会でも御披露の機会を、と野心をもっています。

留学で初めて見たもの

田中 哲男
(1956 U. of North Carolina)

氷川丸の食事で、当時の日本にはまだなかったブロッコリやグレープ・フルーツが出た。大陸横断列車にはトイレ・洗面所付き個室のある寝台車や二階が展望車で一階がブリッジ等のできる談話室の車輌があった。シカゴやニューヨークの駅は巨大な地下駅であった。

殆どの州の運転免許証に写真はなく、白・黒・黄等の人種の表示があった。南部では鉄道の駅待合室やピクニック等のできる州立公園は白人用と黒人用が別に整備されていた。

近況報告

福井 治弘
(1961 U. of Michigan)

簡単な近況報告を送ります。1994年に26年間勤めたカリフォルニア大学サンタバーバラ校政治学部を早期退職した後、日本で筑波、南山両大学と広島平和研究所に数年間ずつ、計11年間勤め、2005年にサンタバーバラに戻りました。その後は、昔の古巣で年に1コマだけ、学部3－4年生相手に日本政治を講義する以外、気ままな読書、年に1－2回の観光旅行、平均年に1本の論文執筆等に明け暮れる退職者生活を送っています。

LAで仕事と生活をEnjoy

阿岸 明子
(1967 California Inst of Tech)

Fulbright奨学金で、AmericaのCalifornia Sacramento State Universityで修士号を、UCLAの教育学部とTESLで博士号を修得してから、もう43年になるでしょうか？ 現在私はLos Angelesに在住し、まだ現役でHollywoodのEntertainmentの仕事(www.ceihollywood.com)と日本語奨学金基金(www.jlsf-aurora.org)のNPOの活動に従事しています。AmericaでもFulbrightの同窓生の活動が活発にあり、各国からの若い現在のFulbright奨学生の応援をしています。いま私が元気でUSAで前向きに仕事と生活をEnjoyできているのは、本当にこのすばらしいFulbright奨学金のおかげと感謝しています。

カウンセリングの草分け

中澤 次郎
(1954 U. of Mississippi)

本年5月に筆者の何冊目かの専門書「カウンセリングとスーパービジョン」が不昧堂より出版される。筆者は早い時期に若い学問であるカウンセリングを米国で学び、日本におけるカウンセリングの草分けとして、発展に努力したので1998年に小淵恵三総理大臣より勲三等瑞宝章を授与された。昨年、米寿となり、来年は卆寿となる。しかし元気で研究を続けている。

「自分史」

田島　穆
(1967 U. of Pittsburgh)

私の自分史『私の個人史と時代背景第一部』（非売品）を作成致しました。

また、某出版社が近々出版予定の『地球が消滅する日』に、社長のご好意で、長崎に投下された原子爆弾を被爆した私の姉の被爆の記「原爆の記」と私のその英訳を載せて頂くことになりました。

起立性調節障害OD

大国 真彦
(1966 Harvard U.)

『起立性調節障害 ― 朝、起きられない子どものために』（芽ばえ社）。朝起きられない小・中学生のための本を出しました。体調が悪く、朝起きられないため学校に遅刻したり欠席したりして、不登校になる子が多いのですが、「なまけ者」と片付けられたり、医師に診て貰っても「たいしたことはない」と言われて適切な治療が受けられないことがよくあります。これは起立性調節障害ODといって身長が伸びる時期の児童生徒に多くみられる病気ですが、有効な治療と介護法が普及していないので出しました。

新刊発行

吉田 章宏
(1964 U. of Illinois)

2010年3月、淑徳大学を75歳で退職しました。まだまだ元気です。

『心に沁みる心理学：一人称科学へのいざない』（吉田章宏編著、川島書店）を2010年春に刊行しました。若い実践的研究者・研究的実践者たちによる、一人称心理学への挑戦的試みです。フォーカシングで世界的に著名なE. Gendlin博士に、「一人称科学」に関するご寄稿もいただきました。読む人の「心に沁みる心理学」です。

英語についての新著

野村 るり子
(1999 Harvard Graduate School of Education)

新著書を出版――「英語の授業では教えてくれない自分を変える英語」（講談社インターナショナル）。留学を希望する若者向けに、異文化理解や異文化コミュニケーションのポイントを整理し紹介した。(野村さんは㈱ホープス代表取締役。設立10周年を記念して、大学学園祭などでの無料講演会も行っている。申し込みはinfo@hopes-net.org)

日米史を学ぶ

小中 陽太郎
(1983 West Virginia U.)

5／8　中目黒教会にて「宮崎東洋の覗いた世界」(マザンナ収容所)上映と語る会。当教会の武間喜美夫人が体験者で、日米史を学びました。

すずきじゅんいち監督は日系二世「442日系部隊アメリカ史上最強の陸軍」を東京国際映画祭で上映しました。

近況

齋藤 千佳
(1993 Tulane U.)

星の王子さまの故郷である中米エルサルバドルに約2年住んでいます！

著書二冊

砂田 一郎
(1999 Harvard Graduate School of Education)

『オバマは何を変えるか』（岩波新書）を一年前に出版しました。オバマ大統領による医療保険など各種の改革や外交政策の転換が、政権最初の八カ月にどのように試みられ、どのような抵抗に会ったかを紹介、分析しています。オバマ大統領はいま政治的苦境に立たされていますが、その背景を知るために役立つことを望んでいます。

フルブライト氏の言葉

小林 悦子
(1950 Earlham College)

1950年、Earlham大学に留学。帰国後、夫が牧師だったので、桜台教会と幼稚園を創立。その後、聖学院小学校長でもあった夫とアトランタに行き、聖学院アトランタ国際学校を設立。「アトランタからこんにちは！」、「今日という日のうちに」の2冊を自費出版しました。桜台幼稚園には、JFMFプログラムで来日なさる先生方を毎年お迎えしてきました。現在、娘が園長ですが、私も毎日、職場で働いています。園児数が少なくなり、運営に苦労しています。こどもの虐待のことや、何でもいいから長時間預かってほしいというような人達も多くなりました。こどもたちがどのように育っていくのか、これから世界の方々と、どのようにつきあっていけるのか、私達が何をしたらよいのか悩んでいます。フルブライト氏に、「どうして私をお選びになったのでしょうか？」とお尋ねした時に、「若いから、ずっと長く、よく働いて、私の思っていたことを伝えていってもらえるから」とおっしゃったことが忘れられません。

『笑いと創造　第六集基礎完成編』の刊行

羽鳥 徹哉（一英）
(1978 Harvard U.)

ひところ、日本人は笑わないという評判がありました。

ベネデクトの『菊と刀』は、日本人の心の中には、一本の固い針金のようなものが入っており、なかなか気楽に心を開かない。その辺りが、これからの民主主義社会建設のために、大いに問題であると書いています。

しかしそれについて、最近では少し考え直さなくてはいけないのではないでしょうか、そうヒベット教授がおっしゃったのは、私が、1978年にフルブライトから旅費を頂いて、ハーバード大学に出かけ、教授にお会いしたときです。

その後先生は、『菊と魚―江戸時代以降の日本の笑い』（講談社インターナショナル、2002年）をお出しになりました。『菊と魚』は言わずと知れた『菊と刀』のパロディです。日本の江戸文学に於ける笑いの豊富さと、それの現代に於ける復活について跡づけられたものです。

私も先生に呼応し、あるいは先生のご協力を得ながら、文学と笑い研究会を立ち上げ、15年が経ちました。そして二、三年に一冊ずつ、論集『笑いと創造』（勉誠出版）を刊行し、今年十一月、その第六集が出ます。

第六集は「基礎完成編」としました。これで一先ず土台が出来上がったので会は終わりとする。後は皆さん、この土台の上に立ち、更に一層、笑いと社会、笑いと世界の問題を考えて行って下さいという意味です。

近代の日本社会で、不自然な笑いが多かったのは、一つには、江戸期から昭和の戦争時代にまで続く、強固な身分社会のせいです。もう一つは、近代日本人の西欧に対する劣等意識のせいです。

日本人の不自然な笑いも、このところかなり是正されてきました。自然でおおらかな笑いこそ、対等な人間関係、対等な国家関係、民主義社会の基礎です。そして、冗談、ふざけ、物まね、滑稽等の日常生活、またお笑い芸能における数々の笑いは、人間の精神的危機を和らげ、救う大きな働きをします。そしてもう一つ、天地、人間を一つにして、運命そのものを笑う、ラブレー、ニーチェ、禅などの笑いは、混沌を払い、将来の道を切り開く上での大きな力となります。『笑いと創造』全六冊は、そうした問題についてのこれまでの私達の探究を、積み上げ、記録してきたものです。

編集部から

先に同窓生からの短信を募集したところ、予想以上の数の短信メッセージが届いた。今回は選択せず、締め切り内に届いたものはすべて掲載した。「短信」ではなく、長文のものについては若干割愛させていただいた部分もある。

今後も短信欄は続けたいので近況、お知らせ、イベント、出版など、なんでも東京フルブライト・アソシエーション宛に送っていただきたい。ただし、スペースの都合上、500字以内で、できればデータ化したものをメールで送信していただけると有難い。(fulb@fulbright.or.jp)

日本のデフレ脱却への方策

大野　熙
TFA事務局長
1956　Northwestern U.

発表後、記念撮影に頬笑む大野事務局長と参加者たち

2010年11月4日（木）～7日（日）、4日間にわたる総会のご報告を申しあげます。当地一流というNHホテルに例年の半分以下の世界16カ国から同窓生が集合しました。アジアからはカタールが1人。後は日本だけという寂しい出席となりました。初日は主催国のアルゼンチンの紹介行事で、目玉は夜7時からの市の立派なホールでのレセプションでした。主催のアメリカの大使が女性で大変立派な演説で迫力充分でした。翌5日は恒例の米フルブライト・アソシエーションの総指揮者、アンダーソン局長の総括年次報告がありました。個別会議が2つと例年の舞踏の専門講義後、着席の正式晩餐会がありました。6日は環境、国際協力についてのパネルがあり、最後に日、独、アルゼンチン代表による、「各国の同窓会活動の革新をめざして」の題のもとに発表、質疑応答がありました。

小職による発表要旨は次の通り。

日本はこの所20年間の世界に稀な“デフレ”に喘いでいる。

政府の対策、原因追求は的外れに終わり、低成長に定着、最初はアメリカ、ついでアジア（特に中国の好況）向けの輸出でなんとか収支を合わせてきた。その間、高齢化による高所得層は、将来の公のサポートに期待するより、自助の貯蓄に励んできた。自己の生活は押さえ、消費よりも貯蓄、海外への投信、国内国債、最近では貿易収支の黒字の数倍の金利所得で世界の注目を集めている。日本は世界一の貿易収支黒字国、投資による債権保持国である。日本国内の需要減で、企業は高いコストの国内生産は赤字になるので設備投資は国内でなく海外へとの流れになっている。日本国内の生産・消費をはからないとデフレからの脱却はない。

対策：

① 若年層に金を使わせる方策。端的には金銭的刺激策で、高等教育、海外留学、やる気の向上策をはかる。高齢者から税のメカニズムをつかっても、もっと消費関数をたかめなければならない。

② 世界と比べて日本ほど女子の活躍が遅れている国は無い。少し意図的に、日本の残った未消化、未活性資源、女性パワーを世に引き出し活性化をはかるべきである。

③ 観光政策促進

④ 移民促進

東京フルブライト・アソシエーションはここ15年に急増した女性同窓生を活性化し、日本改造の先駆者をめざしていく。

その晩は、アルゼンチンならではの「タンゴ」の夕べとなりました。

翌日は午前中、芸術豊かなセッションと国際教育の発表会。その後、昼食、着席のディナーで、本総会、ベストの実のある講演者の演説に耳を傾け、おひらきとなりました。

事務局からのお知らせ

大野　熙

● 誠に残念なことですが、佐藤ギン子会長は健康上の理由により急遽退任ということになりました。全快されることを切望申し上げます。

● 今年度のTFAセミナーは、藤原和博氏、我謝京子さん、梯久美子さんとピカピカの講師で、同窓生からの質問の質も手前味噌ではありますが、ポイントをついた水準の高さで、設営する側としては、仕事冥利につきる満足感があります。

● 今年の第33回フルブライト世界総会はアルゼンチン首都のブエノス・アイレスであり、寸前にワシントン本部の大御所ジェーン・アンダーソン女史から日本からの代表として話をせよとの要望がきました。大急ぎで、日本が先進国の中で、20有余年デフレから抜け出せていない現状の原因を、最も分りやすく説明し、一番効果的なのは米国の到達している女性パワーの発揮が救いの「王手」という筋書きで聴衆に話をしました。高齢化、少子化が進む日本で、残っている「切り札」は有能女性資源の活用です。微力ながらわが同窓会も、この流れの実現を目指して努力したいと考え、直近の若手フルブライト帰国女性群300名の中から何人でも日本を救う“forerunner”になるよう活躍されるように願望してやみません。同じ会議参加者から、各国、米国各州の支部の最大の共通の悩みを集計すると、「如何に同窓会を活性化するか」がトップにランクされます。日本も同様に悩んでいますが、日本の活動実態の話をすると、上位のよい方のグループに入りそうで逆に質問攻めにあう始末でした。ともあれ、活発といえば、トップクラスのドイツでは、若手が熱心で大変うらやましい実情でした。何か同窓会会員同士の「婚活」促進のような「ダンスの催し」がいくつかの市で盛大におこなわれるのが長い伝統のようになっているようです。日本でも参考になりそうでした。

● 60周年事業第1回実行委員会が11月29日(月) 18：00からJUSEC会議室にて開催されました。40周年、50周年経験者も10名弱参加し、今から実行委を立ち上げないといけないという意見で一致していました。先ずTFA会長代行、原田氏に司会・議事進行を務めてもらうことになりました。周年事業遂行の主役のメイン団体である日米教育委員会事務局長サターホワイト氏から基本的な考え方の説明がありました。今回の60周年行事としては、焦点を「ヤング」に絞ることが最大のポイントとしたい。一般にいわれているように、現時点での若者の消極的態度は米国留学希望者の減少としてはっきり現れている。再来年2012年が本番の年としても、来年を何もしないで過ごす事無く、有意義なプレ行事を行いたい。過去のように潤沢な資金の時代と比較すると環境はきびしいが、それなりに順応していきたい。次の70周年にバトン・タッチできるような若手の人材も育成しフルブライトとしての伝統を絶やさないように努力していくことが肝要である。つづいて、出席者からの意見として、有意義なシンポジウムと恒例のレセプションの2本立ては先ず計画の基本として行うというコンセンサスが確認されました。フルブライトの知名度が低下しつつある現状のもとで、「ヤング」に働きかけるのであれば、例えばスタンプラリー、コンテスト、NHKハーバード白熱教室を参考にした企画などアンケートを周到に準備し、次の会合までにまとめることにしました。東京中心でなく、地方とのコラボも是非実現していきたいとの意見もありました。幸い、日米間の一番新しい有識者会議で、日米文化交流活動として、フルブライト奨学金計画がトップクラスのランキングにあることが指摘されている事実が報告され出席者にはうれしいニュースでした。地道な募金活動にも汗を流す指摘もありました。次回会議は2ヶ月後となりました。

有難い寄付のお申し出を頂きました！

長い間、御無沙汰申し上げ、大変失礼いたしました。漸く病気を克服しましたので、寄付を年末までに致します。

金額　約六万円前後。

千葉市稲毛区在住

玉置文一　1958 Worcester Found

東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014　東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビル416
TEL: 03-3503-1841　FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp
(HPは、フルブライト・ジャパンのHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。)

第35回日米交流チャリティー・ゴルフ大会

日本人フルブライター歓送会